



北海道遺産情報誌

vol.6

# 「まち、ひと、北海道遺産」

## 第2章

北海道の馬文化(ばん馬、日高のサラブレッドなど)／屯田兵村と兵屋／アイヌ口承文芸／ジン  
機関車「雨宮21号」／野付半島と打瀬舟／モール温泉／静内二十間 【Hokkaido】  
登別温泉地獄谷／北限のブナ林／スキーとニセコ連峰／積丹半島と神  
／開拓使時代の洋風建築(時計台、豊平館、清華亭など)／江別のれんが／北海幹線用水

ギスカン／サケの文化／流氷とガリンコ号／オホーツク沿岸の古代遺跡群／森林鉄道蒸気  
Heritage】道路の板木／函館西部地区の街並み／五稜郭と箱館戦争の遺構／  
威州／ニッカウキスキー余市蒸溜所／札幌苗穂地区の工場・記念館群  
路／雨竜沼湿原／土の博物館「土の館」／旭橋／天塩川／宗谷丘陵の周米河地形



文跡 琴似 北田兵村 共屋記

# 「まち、ひと、北海道遺産」 第2章

執筆：北海道遺産選定専門委員

倉本 龍彦／合田 一道／越野 武／辻井 達一／永井 信／山田 大隆／(北海道遺産構想推進協議会事務局)

## 北海道遺産の分布（全52件）



### <北海道各地>

- 45. 屯田兵村と兵屋
- 46. 北海道の馬文化  
(ばん馬、日高のサラブレッドなど)
- 47. アイヌ語地名
- 48. アイヌ文様
- 49. アイヌ口承文芸
- 50. サケの文化
- 51. 北海道のラーメン
- 52. ジンギスカン

## 北海道に生まれた物語、北海道が伝えるメッセージ

一つひとつの北海道遺産には、北の大地に生きた先人たちの物語がつまっています。そうした物語は、ここに生きる私たち道民、北海道を愛するすべての人、そして将来、北海道を創造していく次の世代に対して、忘れてはいけないメッセージを伝えています。私たち一人ひとりが、足元にある宝物に気づき、誇りに思い、大切に、活用することで新しい魅力をつくっていくことこそが北海道遺産構想が目指すものです。

今後、北海道遺産だけでなく、それぞれのまちから、物語性の豊かな魅力の種が生まれ、育まれていくことでしょう。種の大きさはそれぞれです。大きければよいとか、小さいからだめというものではありません。一つひとつは小さくても、たくさんの元気や魅力が集まれば、新しい魅力を持った「大きな北海道」をつくっていくことが可能なのではないのでしょうか。

いつか、まちを離れていった子どもたちが自慢できる「ふるさとづくり」。まちを愛し、楽しむ「地域人づくり」。地域の歴史や文化を発信していく「物語づくり」。活用することで経済につなげられる「資産づくり」。次の世代へ遺し、引き継ぐ「まちづくり」。

今を生きる私たちから、未来の北海道人たちへ大切なメッセージを遺してみませんか。



# 北海道遺産

Hokkaido Heritage

## 北海道遺産とは

次の世代に引き継ぎたい北海道の大切な宝物です。豊かな自然はもちろん、北海道に生きてきた人々の歴史や文化、生活、産業など有形・無形の財産の中から、道民参加によって選ばれました。

平成13年10月に第1回選定分25件が、平成16年10月に第2回選定分27件が決まり、52件の北海道遺産が誕生しています。

## 北海道遺産構想とは

まちの宝物を探し、それを守り、磨き、活用する過程で、まちの元気や魅力の種を育み、新しい魅力をもった北海道を創造していく運動です。北海道遺産の多くには、北海道遺産に深く関わりながら活動する「担い手」の市民が存在し、官主導ではない構想の象徴となっています。

すでに、北海道遺産が所在するまちでは様々な活動が展開されるとともに、企業によるツアーや北海道遺産関連の商品開発も進み、この構想は着実に歩み始めています。



## 北海道遺産分布図… 2

## 「まち、ひと、北海道遺産」第2章

## 第2回選定27件

- 6 …北海道の馬文化（ばん馬、日高のサラブレッドなど）
- 屯田兵村と兵屋… 8
- 10 …アイヌ口承文芸
- ジンギスカン… 12
- 14 …サケの文化
- 流水とガリンコ号… 16
- 18 …オホーツク沿岸の古代遺跡群
- 森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」… 20
- 22 …野付半島と打瀬舟
- モール温泉… 24
- 26 …静内二十間道路の桜並木
- 函館西部地区の街並み… 28
- 30 …五稜郭と箱館戦争の遺構
- 登別温泉地獄谷… 32
- 34 …北限のブナ林
- スキーとニセコ連峰… 36

38 …積丹半島と神威岬

ニッカウキスキー余市蒸溜所… 40

42 …札幌苗穂地区の工場・記念館群

開拓使時代の洋風建築(時計台、豊平館、清華亭など)… 44

46 …江別のれんが

北海幹線用水路… 48

50 …雨竜沼湿原

土の博物館「土の館」… 52

54 …旭橋

天塩川… 56

58 …宗谷丘陵の周水河地形

#### 第1回選定分追加

小清水原生花園… 60

61 …江差追分

### 第1回選定25件の横顔… 62

## 第3回「北海道遺産 絵手紙・写真コンクール」入選作品

絵手紙の部… 66

写真の部… 68

携帯写真の部… 70



# 「人馬一体」で進められた開拓

雄大な日高山脈を背景に広がる牧場の風景は、馬産地北海道の象徴的景色である。このように多くの牧場が集まっている地域は、世界的にも珍しいとされるが、この牧歌的な地域は、北海道の代表的イメージを形づくっている。そして、沿道にはすでに現役を退いた中央競馬の名馬たちが繋養され、多くのファンを楽しませている。

北海道で馬は、明治以前から、和人の移住が進むとともに、海岸沿いの集落から集落へ、旅人や荷物を運んだ「どさんこ」が活躍していた。開拓使時代に入り、内陸へと開拓が進み農耕地が拡大すると、農耕用のより強力な馬が求められるようになり、品種改良のため、フランスやベルギーなどから、ペルシジョン種やブルトン種などの重種馬が輸入された。馬は農民にとって労働力として苦勞を共にしたパートナーであり、農閑期には、互いの馬の能力を競うお祭りばん馬が各地で催され、それが、迫力あふれる「ばんえい競馬」に発展した。

「ばんえい競馬」は、旭川・帯広・北見・岩見沢の各市で開かれ、1トンを超える馬体が荷重をかけた馬車を牽く力強い競い合いを見せている。その勇壮な姿は、原産地で姿を消しつつある重種馬、その原産地の一つフランスからの視察団に、大きな感銘を与えた。

また、馬の速さを求めて、競走馬の改良が進め

られ、サラブレッドのよりすぐれた血統が生産されている。北海道ではサラブレッドの国内生産約8200頭のうち、90%が生産されており、まさに馬産地王国であるが、近年は外国産馬の輸入増などで苦境に立たされ、育成に力を入れ国際競争力をもった強い馬づくりに取り組む必要が生じている。

こうした競馬の国際化時代を迎え、日本中央競馬会（JRA）は育成・調教技術の向上、生産地の人材養成、生産育成の研究と普及のため、浦河町に日高育成牧場・日高育成総合施設軽種馬育成調教場を開設し、広く生産・育成者に門戸を開き、世界に通用する強い馬づくりを目指している。ここで育成された馬たちは、中央競馬・地方競馬にその活躍の場を求めて巣立っていく。北海道における競馬は、札幌競馬場・函館競馬場での中央競馬、門別競馬場・札幌競馬場・旭川競馬場での地方競馬「ホッカイドウ競馬」として開催されている。

公式の競馬から消えた繋駕レースが、その走りの美しさに魅せられた愛好者によって、生きていく。サラブレッドより一回り小さいトロッター種が二輪の馬車を牽いて走る繋駕レースは、日本では明治時代から行われていた。しかし、どれか一本の足が地面についていなければならないという独特な走法の規定があり、その判定が難しく、1970（昭和45）年を最後に姿を消したのであ

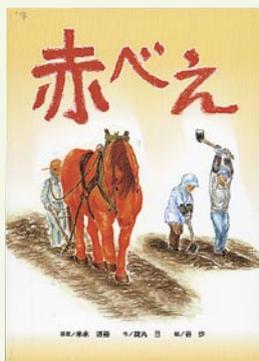


JRA日高育成牧場

## 馬が家族だった頃を伝える1冊の絵本

『赤べえ』という絵本がある。かつて、農耕馬が、家族の一員として荷物を運び、未開の大地や畑を耕し北海道の大地を作り出したその歴史を現代の子供たちに伝える物語である。十勝馬事振興会が2004（平成16）年に発行し、北海道の小学校に配った。

絵を描いたのは、ばんえい競馬の厩務員をしている谷歩さん。毎日、馬とふれ合う谷さんだからこそ描ける馬の表情を、絵本の中に見ながら、子供たちは北海道と馬の特別なつながりを学び、育っていく。



るが、その6年後、道東地方を中心に、草競馬として復活した。いまは、熱い思いの支持者によって、道東の浜中町や別海町、浦河町などで競技会が開催されている。

馬は、人や荷物を運ぶ、速く走るといっただけではなく、ふれ合うことによって人々の心や体に癒しをもたらす。各地で、自然の中を馬に乗って歩くホーストレッキングが盛んに行われているのはそのためと思われ、見る馬からふれ合う馬へと広がりがつつある。世界各地の伝統ある競馬場の周辺には、乗馬療法の施設が併設されており、日本で

## 日高のサラブレッドは地域そのもの

遠くからドドドッ、ドドドッと地面の鼓動がなり始める。やがて緑の大草原の彼方から、調教中の十数頭の馬が現れ、地鳴りとともに通り過ぎていく。北海道でしか味わえない雄大さと感動がある。JRA日高育成牧場の敷地は1504.8ha。世界で勝てる馬づくりを進めると同時に、最近では、地元の町民乗馬教室や観光客への見学コースも設定し、人と馬をつなぐ取り組みを進めている。日高地方の9町では、2004（平成16）年「ひだか馬立国宣言」を行った。この育成牧場を中心に、地域が観光、産業、教育、生活とあらゆる面での馬のかかわりを大切にし、日高地方をさらに「元気」にしていこうとする意気込みが伝わってくる。

も、ホースセラピーの有用性が認識されて、心身の障害者療育に活用されるようになってきている。障害者の方々が馬にふれたり、乗ったりすることで、情緒の安定や、身体的機能の向上などの効果が実証されているからで、何よりも行動範囲が広がり、野外活動への参加が可能なのが大きな魅力となっている。

馬は、人間の友として長い間ともに歩んできた。そして各地で、数々の馬事文化を生み出してきた。いままた人は、馬によって、楽しみを、癒しを、そして新しい文化を生み出そうとしている。

### Data



●お問い合わせ先  
 北海道市営競馬組合（ばんえい競馬）  
 Tel. 0166-25-9090  
 JRA日高育成牧場 Tel. 01462-8-1211  
 日高支庁地域政策課 Tel. 0146-22-2211  
 北海道和種馬保存協会 Tel. 011-232-5554



どさんこのトレッキング風景



札幌市の琴似に残る屯田兵屋

# 37の兵村に響いた テッパの音

屯田兵とは、明治期に北海道内に配備された農業開拓兼務の軍隊制度で、1875（明治8）年に札幌郡琴似村（現在の札幌市西区琴似）に第一大隊第一中隊の兵村が置かれたのが始まりである。

兵村は一中隊200戸を単位に編制し、兵は家族とともに兵村の住居「兵屋」に居住し、軍事訓練と開墾に励んだ。兵屋は平屋建てで56・7㎡、マサ葺き屋根、8畳と4畳半の和室に、炉と流し付きの9畳ほどの板の間、同じ大きさの土間があった。家族はこの和室で寝起きし、炉のある部屋が食事や団欒の場になった。便所は外にあり、井戸や浴室も外に作られ、共同で使った。

質素な建物なので、冬期間の寒さは厳しく、時には生木を炉にくべたので、煙が部屋中に充満し、目を傷める人が続出した。また野ネズミが出没するので、土別屯田などではやむなくネコを配るという苦肉の策もとられたという。

屯田兵は当初、北辺の防備と土族の救済が目的だったが、1877（明治10）年の西南戦争では、琴似・山鼻の両屯田兵にも出兵命令が下り、各地を転戦した。この戦いで27人の戦死者を出した。

1890（明治23）年から応募資格が士族だけでなく平民まで広げられたが、1894（明治27）年に日清戦争が起きると、屯田兵を中心に臨時第7師団が編制され、出動体制が組まれた。2

## 北見に残る屯田兵人形

北見市川東の信善光寺本堂に珍しい屯田兵人形75体が祭られている。この人形は開基の吉田信静尼が、ノツケウシ（現在の北見市）地区に入植して苦勞を重ねた屯田兵の功績を後世まで伝えようと発願し、屯田戸主の協賛を得て、名古屋市の玉正商会に発注、人形師の荒川宗太郎が、弟子の木場賢治と二人で製作した。

信静尼は屯田兵屋を回って熱心に説いたが、最初のころは、「生きているうちに寺に収める人形を作るなんて」と嫌がる人もいて思うように進まない。それでも信静尼は何体かずつまとまると発注し、出来上がった人形から順に本尊脇のひな段に並べていった。

ところが1944（昭和19）年2月2日、信静尼は町に行こうと道を歩いていて馬そりに轢かれ亡くなってしまふ。突然の死だった。享年64。これをモデルにしたのが新田次郎の小説『野付牛の老尼』である。

屯田兵人形の材料はキリとサワラ材で、高さ67・5cmに統一されている。中央に三輪光儀大隊長を据え、全部で75体の兵士の人形が並んでいる。大隊長だけ作りが違うが、あとは63体が黒色軍装、11体がカーキ色の軍装だ。顔の表情は写真などを使って作ったので、



上湧別町のJRYに移築保存されている屯田兵屋

### 屯田兵村の分布

| 所属大隊 | 現市町村名   | 兵村名      | 移住年  | 兵年数 |
|------|---------|----------|------|-----|
| 第一大隊 | 札幌市     | 琴似       | 明治 8 | 208 |
|      |         | 琴似(発寒)   | 明治 9 | 32  |
|      |         | 山鼻       | 明治 9 | 240 |
|      |         | 新琴似      | 明治20 | 220 |
|      |         | 篠路       | 明治22 | 220 |
|      | 室蘭市     | 輪西       | 明治20 | 220 |
|      | 秩父別町    | 秩父(東・西)  | 明治28 | 400 |
| 深川市  | 一己(北・南) | 明治28     | 400  |     |
|      | 納内      | 明治28     | 200  |     |
| 第二大隊 | 江別市     | 江別       | 明治11 | 160 |
|      |         | 江別(篠津)   | 明治14 | 60  |
|      |         | 野幌       | 明治18 | 225 |
|      | 滝川市     | 滝川(北・南)  | 明治22 | 440 |
|      |         | 江部乙(北・南) | 明治27 | 400 |
| 第三大隊 | 旭川市     | 永山(東・西)  | 明治24 | 400 |
|      |         | 旭川(上・下)  | 明治25 | 400 |
|      | 当麻町     | 当麻(東・西)  | 明治26 | 400 |
|      | 剣淵町     | 剣淵(北・南)  | 明治32 | 337 |
| 士別町  | 士別      | 明治32     | 99   |     |
| 第四大隊 | 根室市     | 和田(東・西)  | 明治19 | 440 |
|      | 厚岸町     | 太田(北・南)  | 明治23 | 440 |
|      | 北見市     | 上野付牛(相内) | 明治30 | 199 |
|      |         | 中野付牛     | 明治30 | 198 |
|      | 端野町     | 下野付牛     | 明治30 | 200 |
| 上湧別町 | 湧別(北・南) | 明治30     | 399  |     |
| 特科   | 美唄市     | 美唄       | 明治24 | 160 |
|      |         | 高志内      | 明治24 | 120 |
|      |         | 茶志内      | 明治24 | 120 |

出典：HP「歴史東旭川屯田兵屋」

年後には第7師団が創設されたので、屯田兵制度の意味合いが薄れ、1899(明治32)年の士別、剣淵の両兵村を最後に募集を中止した。この25年間で37の兵村が建設されたことになる。

支庁別に見ると空知が最も多く12村を数え、上川が9、石狩が6と続き、以下、網走、根室、釧路、胆振が1、2村。大多数の兵村が北海道中部に集中しているのが特徴といえる。

札幌市西区琴似、美唄市、士別市、厚岸町太田、根室市和田などに兵屋や被服庫、札幌市北区新琴似、江別市野幌に中隊本部の建物が保存されている。

その中で上湧別町は当時の屯田区画である北地区と南地区がいまもそっくり残っており、往時を偲ぶことができる。秋に行われる屯田祭りには屯田兵の衣装をまとった屯田三世らによるパレードが会場を練り歩き、人気を呼んでいる。また、町立博物館ふるさと館JRYには、実物の屯田兵屋をはじめ、生活資料が豊富に展示されている。

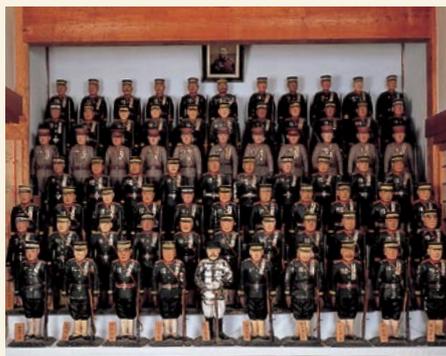
北海道の開拓は本州以西からの入植(特に東北・北陸からの入植者が多い)によるものであり、生活形態や開墾の状況を把握するのは難しい。しかし、屯田兵は各地に史料が残っており、そこで見ることができるといえる。

それは、北海道の開拓の状況、生活、住居などの形が、本道開拓の一つのサンプルとしてとらえることができる。

それゆえに、この屯田兵による開拓は、士族移住村、団体移住民村と並んで特筆されるものである。

### Data

●お問い合わせ先  
札幌市観光文化局文化課  
Tel. 011-211-2312  
上湧別町ふるさと館JRY  
Tel. 01586-2-3000  
※湧別屯田兵の入植風景をジオラマや立体映像により紹介。明治30年に造られた屯田兵屋が移築展示されている。  
休館日：月曜日、祝日の翌日、年末年始  
入館料：大人400円、高校生250円、小中学生200円  
北網圏北見文化センター  
Tel. 0157-23-6700



それぞれ違う。

北見屯田会長の竹口武雄さんは、祖父の人形を見つめながら、「よくぞ立派な人形を残してくれたものと感謝しています。もし人形がなかったら、お寺に来ても寂しい思いをしただけです。わが家の家宝みたいなものです」としみじみ語る。

# 人から人へ、 途切れることなく語り伝えること



「サコロベを語る」『アイヌ風俗絵巻』（市立函館図書館蔵）

アイヌ民族が育んできた文化の一つ「口承文芸」。人から人へ、長い間、途切れることなく語り伝えられてきた。文字で書かれた文芸と違って、語り方や表現などにその人、その時ならではの味わいがある。

アイヌ口承文芸の物語には「英雄叙事詩」「神謡」「散文説話」などがある。比較的よく耳にする「ユーカーラ」という言葉は、英雄叙事詩を指す呼び名の一つ「ユカウ」から来ている。英雄叙事詩は地域によって「サコロベ」「ハウキ」などとも呼ばれているように、アイヌ口承文芸は、地域によって種類や区分、呼び方が違う。

「英雄叙事詩」には、空を飛んだり、海に潜ったり、土の中を突き進んだり出来る超人的な力を持つ少年の愛と冒険の物語など、わくわくする壮大なストーリーが多い。戦いの場面では激しい描写が繰り返され手に汗を握る。物語は長大で、数十分から数時間、短いメロディーを繰り返しながら物語の言葉をのせるようにして語られる。語り手や聞き手は、木の棒などを持って、座っている近くをたたきながら拍子を取り、物語の展開に応じては短いかけ声をかけたりもする。

アイヌの信仰では、あらゆるものに「魂」が宿っており「カムイ」と敬う。「神謡」には、動物や植物、火、水、雷、病気などの様々な「カムイ」が登場し、カムイの世界や人間の世界で体験したことを

## 平取町と白老町の取り組み

平取町に住む川上将史さんは22歳の青年。財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が開催するアイヌ語弁論大会の第7回（2003年）優勝者だ。この大会は毎年全国から約20人が参加。英雄叙事詩や神謡などそれぞれが、それぞれの節で披露する。すべて暗唱して数分を演じ上げる小学生もいる。

平取町では、北海道ウタリ協会の支部が開設しているアイヌ語教室や、町立二風谷アイヌ文化博物館が実施している学習プログラムなどで継承者の養成が図られている。川上さんも、このプログラムで初めてアイヌ口承文芸に本格的に触れ、伝承を志すようになった一人だ。

ユカウは、「まねる」という意味をもつ。川上さんは、文字には依存しないで記憶し、口伝えで受け継がれてきた文芸は、よく聴いて、覚えて、繰り返しそらんじることを基本にして習得した。大変なようでも、そのように努力することで、しっかり身につけ、味わい豊かに表現できると、自身の体験をふりかえり話す。同じように努力して、アイヌ語で物語る仲間がだんだん増えてきている。語りの文芸を聴いて楽しもうとする人、つまりファンを増やし鑑賞力を高めることも「伝え

|             |  |
|-------------|--|
| 概説書         | 中川裕『アイヌの物語世界』平凡社 1997年960円(税込み)  |
| アイヌ語原文の物語など | 知里幸恵(編訳)『アイヌ神謡集』岩波書店 1978年400円(税別)<br>萱野茂『カムイユカラと昔話』小学館 1988年3,796円(税別)<br>中本ムツ子(語り)片山龍峯(編・解説)『アイヌの知恵ウバシクマ1』片山言語文化研究所(発売:新日本教育図書) 1999年2,500円(税別)  |
| 童話・絵本       | 川上まつ子(語り)・中村齋(文)・北市哲男(絵)『ボロシルンカムイになった少年』(財)アイヌ民族博物館 1986年<br>萱野茂(文)・斎藤博之(絵)『アイヌの民話絵本』小峰書店 1998-1999年1,400円(税別)<br>松谷みよ子(文)・西山三郎(絵)『ちいさなおキクルミ 日本のみんな絵本』ほるぷ出版 1985年本体1,450円(税別)<br>神沢利子(文)・赤羽末吉(絵)『けちんぼおおかみ』偕成社 1987年  |
| ビデオ・CD      | 中本ムツ子(うた)片山龍峯(復元)『「アイヌ神謡集」をうたう』草風館 2003年3,000円(税別)<br>『アイヌ民族博物館 伝承記録3・昔話 上田シウエベケレ』(財)アイヌ民族博物館 1997年1,500円(税込)<br>萱野茂『萱野茂のアイヌ神謡集成』全10巻ビクターエンタテインメント 1998年189,000円(税込)<br>萱野茂・平取アイヌ文化保存会『アイヌのうた』ビクターエンタテインメント 2000年1,995円(税込)<br>『アイヌ文化を学ぶ』(財)アイヌ無形文化伝承保存会 1995年4,500円 |



●お問い合わせ先  
平取町立二風谷アイヌ文化博物館  
Tel.01457-2-2892  
白老町教育委員会社会教育課  
Tel.0144-85-2020

「散文説話」は、主人公も話の内容もバラエティーに富んでいる。よい心がけを持つ主人公は、様々な苦勞や危機を経ても最後には幸せな結末を迎えるというような社会で生きていく上での心がけを伝えるものや、その土地での出来事や先

祖が体験したことなど大切に伝えていくべき物語などもある。日常会話に近いような語り口調や、それよりもやや単調に聞こえる口調、逆にやや大きく抑揚をつけたりする口調で語られる。「アイヌ神謡集」の著者・知里幸恵(1903年~1922年)。病に冒され19歳でその生涯を閉じるまで記述を続けた。2003(平成15)年、知里幸恵生誕100周年を機に「アイヌ神謡集」が注目され、さまざまな催しが開催されるなど、アイヌ口承文芸がより一層、身近になった。「銀のしづく降る降るまわりに……」の美しい一節が印象的だ。

語りながら、動植物や自然界の出来事に対する人間の心構えなどを教えてくれる。多くの場合、語り手であるカムイがだれであるかは、物語の最後に「……と〇〇が語りました」といった形で初めて明示される。物語ごとにおおよそ決まったメモディーに「アテヤテヤテンナ テンナ」「フムフム カト」などの言葉が、繰り返し繰り返し挿入され、独特のリズムをつくり出している。

アイヌ文化を保存し伝える団体や各地域では、口承文芸をはじめアイヌ文化を広く紹介し理解を深めるため、さまざまな取り組みが進められている。口承文芸を学ぶための文献やCDも整い始める。(上の表参照)、また、図書館や博物館で聴くことができるようになってきた。

「環境づくり」として重要だ。そのための機会を多様に設けていこうというのが、担い手団体としての平取町の考え方だ。

白老町では、アイヌ文化の教育・文化施設、財団法人アイヌ民族博物館や、国の重要無形民俗文化財に指定されているイオマンテリムセ等、数々のアイヌ古式舞踏を伝える白老民族芸能保存会、そして北海道ウタリ協会白老支部とともにアイヌ文化の保存・伝承・普及・振興に取り組んでいる。

特にアイヌ民族自らが運営するアイヌ民族博物館は、アイヌ語や古式舞踏、アイヌ民族独特の楽器ムツクリ、さらにはさまざまな儀式や食文化を学ぶ体験学習が復元されたチセ内で開催されるなど、アイヌ文化に直にふれられ、かつ体験できる伝承の里となっている。中でもアイヌ口承文芸を学ぶ事業については、白老地方に伝わるアイヌ語やウエベケレなどの概要等、専門的な説明を学芸員や研究者から受けながら、伝承者の語るカムイユカラを聞き、物語が伝えたい事柄や単語の意味などを学ぶことができる定期的な催しであるなど、伝承者の育成にも力が注がれている。

近年では、これらの事業で学んできた方々が指導者となって、独自にアイヌ文化の振興、次世代に向けた取り組みを進めている。

# 北の花見は 煙を透かして 仰ぎみる



食の北海道遺産が「ラーメン」に引き続き誕生した。北海道では、花見や海水浴、キャンプなど人が集まるとジンギスカンを食べ、大学生の間には「ジンパ」と呼ばれるジンギスカンパーティがある。あちらこちらにジンギスカンの専門店があり、北海道を訪れる観光客はビールとともにジンギスカンを楽しむ。ジンギスカンは名実ともに北海道ならではの食文化である。

しかしジンギスカンには謎が多い。ルーツ、名前の由来、鍋の形、食べ方などに諸説があり、ジンギスカンの話は尽きない。北海道になぜ定着したのかも不思議だ。

北海道で初めて羊肉が食べられたのは大正時代と言われる。明治時代に、羊毛は軍服の大切な素材となっていたが、第一次大戦時に輸入が絶えたことから、政府は、国内での綿羊飼育のため、1918（大正7）年「綿羊百万頭計画」を打ち出し、滝川、札幌月寒など全国5カ所に種羊場を開設した。その際、羊毛としてだけではなく、羊肉をはじめ羊のさまざまな活用方策の研究が全国で始められ、北海道でも2つの種羊場を中心に取組が進められた。満州に渡った日本人がモンゴルの羊の焼き肉「烤羊肉（カオヤンロウ）」をヒントに考えたと言われるが、味付けなど羊肉を美味しく食べる工夫が凝らされ、新しい料理として北海道で生まれたといえる。

最初のレシピは、月寒種羊場の山田喜平さんが1931（昭和6）年に書いた『綿羊と其飼ひ方』（北海道大学図書館収蔵）の中にあつたようだ。いくつかの羊肉料理が紹介されている中に「成吉思汗（ジンギスカン）」もあり、「羊肉を3ミリくらいの厚さに切り、醤油・酒・砂糖・トウガラシ・シウガ・ネギ・ごま油を合わせた中に30分ほどつけ、七輪にのせた金網で焼きながら食べる」とある。

1936（昭和11）年には、札幌狸小路の「横綱」という店に初めてジンギスカンがメニューとして登場した。羊肉独特の臭みと戦い、試行錯誤しながら、途中、閉店時期もあったが、1969（昭和44）年まで続いたという。

1953（昭和28）年には、札幌に「ツキサップ成吉思汗クラブ」が発足した。会員制で当時は北海道知事や旧北海道拓殖銀行頭取など北海道の各界から会員が集まり、ジンギスカンを盛り立てた。この頃から次第にジンギスカンが定着し始めた。

1956（昭和31）年、ジンギスカンの老舗「松尾ジンギスカン」が滝川市で創業した。滝川種羊場が推奨していた肉をタレに漬け込むスタイルを生かし、滝川産のリングゴとタマネギをふんだんに使いながらおいしさを引き出す独自のタレを開発した。まさに滝川ならではの味だ。

ジンギスカンの「鍋」は独特で、中央が盛り上がり鉄かぶとの形をしている。中央で肉を焼き、周囲でモヤシやタマネギなどの野菜を焼くと肉汁やタレが野菜にしみこむ。松尾ジンギスカンでは、鍋を岩手県の南部鉄の業者に発注しているという。

ジンギスカンには、あらかじめタレにつけ込んだ肉を焼く方法と、焼いた後にタレをつける方法の2系統あるが、後者を焼くために、鉄かぶと型でも穴が開いている鍋もある。

「ジンギスカン」という勇ましい名前もユニークだ。命名に諸説ある中で、満州鉄道の調査部長で後に満州国国務長官になった駒井徳三氏が名付けたという説がある。娘の満洲野さんが1963（昭和38）年に書いたエッセー『父とジンギスカン』の中に「…羊肉は大正の頃から日本人も食べ始めたといわれる。それをジンギスカン鍋と名付けたのが私の父自身であつたらしい。父は名前をつけることが好きで（中略）ジンギスカン鍋も蒙古の武将の名をなんとなくつけたのかもしれない」と書いている。

滝川や長沼、厚真など地域のジンギスカンが特産品となり地域づくりにも一役買っている。リーズナブルで庶民的、鍋をつつきながら会話が弾むジンギスカン。食文化としてだけでなく、現代の家族や社会に忘れがちなコミュニケーション文化も伝えていく大切な遺産である。

## 北海道発のムーブメントを

「北海道の食として、ジンギスカンをより一層盛り立てよう！」と声をかけるのは2003（平成15）年に発足した「ジンギスカン食普及拡大促進協議会」会長の飯田隆雄さん（札幌大学経済学部教授）。ジンギスカンフォーラムを開催したことをきっかけに、同協議会を立ち上げた。2004（平成16）年には4月29日を「羊肉（ヨーク）の日」として記念日協会に申請し認められた。北海道で花見が始まるこの頃、

人々は心を弾ませジンギスカンの準備を始めるからだ。同協議会では、ジンギスカン同好会や業界に声をかけながら北海道発のムーブメントを起こしたいと考えている。「今では羊肉のほとんどは輸入になっているが、一緒に食べる野菜やお米、ビールは北海道ならではのもの。経済効果も大きい。北海道産の羊肉を使ったスペシャルのジンギスカンも楽しめたらいいですね」と飯田会長は語る。



ジンギスカンの最初のレシピは『綿羊と其飼ひ方』（昭和6年）に登場した。

## Data

- お問い合わせ先  
滝川市経済部商工労働課観光室  
Tel. 0125-23-1234
- ジンギスカン食普及拡大促進協議会(事務局)  
Tel. 011-221-2639

# 捨てるしつろいの ない「神の魚」

日本一の水揚げを誇る標津町のサケ漁

生まれた川を一生忘れず、長い旅に出ても再びそこに帰ってくる。サケは不思議な魚だ。

北海道には「サケ」をめぐるさまざまな文化が形成され、生活の中に深く入り込んでいる。その歴史は古く、擦文時代の遺跡からサケを捕獲したと推定される装置も発見されている。サケから多くを学び多くの恩恵を得てきた。

「サケ」といってもその種類はさまざまで、サケ科サケ属の代表的なものでも、シロザケ、ギンザケ、ベニザケ、キングサーモン、カラフトマス、ニジマスなど多くの仲間がいる。これらの中で、国内で漁獲されるのは「シロザケ」が圧倒的に多いが、そのシロザケにも、成熟度や時期によって「秋サケ（アキアジ）」「メジカ」「トキシラズ」「ケイジ」など呼び名が幾通りもある。例えば「ケイジ（鮭児）」は、1万本に1本といわれる幻のサケ。翌年以降に産卵を迎える未成熟のもので、卵巣や精巣に栄養を送る必要がなく越冬前に栄養を蓄えていることから、丸々と太っている。脂ののりと、その希少性から、一本数万円から十万元以上の値がつくものもあるという。

知床半島の付け根にある標津町は、我が国で最大の水揚げ量を誇るサケの町で、この10年で6回、日本一となった。日本全体でのサケの漁獲高は2004（平成16）年で23万9000トン。そのうち北海道で水揚げされるのが19万4000ト

んで全体の約81%を占め、さらに標津ではおよそ1割を占める。

4～6月にかけて海へ出た稚魚は、夏をオホーツク海で過ごし、翌年の夏にはベーリング海へと移動する。その後、冬にはアラスカ湾、夏にはベーリング海を回遊し、3～4年ほど海で過ごし大きく成長したサケは、産卵する年の7月頃から千島列島にそって南下して日本沿岸に到着し、生まれたい川においてかぎわけながら戻ってくる。

北海道沿岸で行われる「秋サケ」漁は、こうして川に戻るサケを捕らえる定置網漁法が主となっており、使われる定置網は全長およそ1.5km、幅300mほどで、手網、胴網、落とし網の三つの部分からできている。手網に行く手をさえぎられたサケが、網沿いに泳いでいるうちに胴網、落とし網へと入り、最後には網から出られなくなつて捕獲される。網だけで1億円以上するものもあるが、一回の落とし網に3000尾近くも入ることがあり、網をたぐり寄せる作業は豪快だ。

北海道の食文化においてもサケは大きな位置を占める。捨てるところのない魚と言われ、身はもちろんのこと、筋子、氷頭（頭部の軟骨）も人気だ。背わた（腎臓）の塩からは「めふん」と呼ばれる珍味であり、1尾に一つかない心臓の串焼きもある。さばいた後のアラは、石狩鍋（みそ味）や三平汁（塩味）に使われ、まさに捨てるところは

## サケは自然の使者

秋になると全道各地の川で、サケの遡上が見られる。また、サケの生態を間近に見ることが出来る施設や取り組みも多い。標津町の「サーモン科学館」には、標津川に直結した魚道水槽があり、川を遡る自然のサケの産卵風景や稚魚の遊泳を見ることが出来る。千歳市にある「インディアン水車」と呼ばれる捕獲施設では、千歳川を遡るサケが1尾ずつ水車にかかってくる様子を橋の上からも直接見ることが出来る。

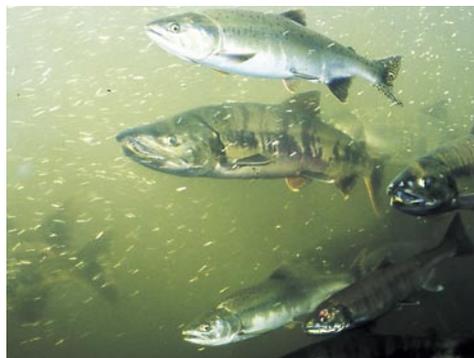
札幌市の中心部を流れる豊平川にもサケが遡上する。一時期、サケの遡上が見られなくなったが、「カムバック・サーモン運動」が子供たちや民間企業の間で大きな輪となって広がり、稚魚の放流や魚道整備、きれいな川を呼び戻す浄化運動などが展開された。大人も子供も、都会の真ん中にサケがのぼり、産卵することを誇りに思っている。それはきれいな自然環境づくりのバロメーターでもあるからだ。



サーモン科学館（標津町）



捨てるところのないサケの料理法は多様だ



ない。成熟した天然のサケだからこそその「山漬け」は、漁師の保存食。塩をたっぷりすり込んだサケに重しをし、ひと月ほど熟成させ保存する。これを食べるために塩出しをして、漁師が寝泊まりする番屋の軒に何本もぶら下げられることから、別名「番屋鮭」などとも言われる。

サケはアイヌ語で「カムイ・チェップ（神の魚）」と呼ばれる。遡上の時期になると新しいサケを迎え、神からの贈り物に感謝する「アシリチェップ

ノミ」と呼ばれる儀式を行う。アイヌ民族にとっても、食としてばかりではなく、サケの皮で靴や着物などの日用品を作るなど生活と密着した大切な魚であった。

長い旅を終え、身をボロボロにしながらふるとの川を遡るサケ。最後の力を振り絞って、産卵、受精を終え、力尽き生涯を閉じるその姿は感動的で、生命の壮大なドラマとも言える。

### Data



#### ●お問い合わせ先

標津町水産課 Tel.01538-2-2131  
 標津サーモン科学館 Tel.01538-2-1141  
 開館時期：5～10月は無休。2～4、11月は水曜休館（水曜が祝日の場合は翌日）。12～1月は休館。  
 開館時間：9:30～17:00  
 （入館は16:30まで）  
 入館料：一般610円、高校生400円、小中学生200円（団体割引あり）。

# 「邪魔者」を知恵と工夫で 観光の目玉に



## 流氷研究のメッカ

流氷は、わが国では、北海道のオホーツク海沿岸でしか見られないことから、昔から研究者の関心を集めてきたが、1965（昭和40）年に北海道大学の低温科学研究所は、紋別市に附属流氷研究施設を設置し、流氷に関する学術的研究を進めてきた。1969（昭和44）年には沖合50kmの範囲をカバーする流水観測用のレーダーを枝幸・紋別・網走に設置し、運用してきた。2004（平成16）年、国立大学の独立行政法人化に伴い、流氷研究施設を廃止し、環オホーツク観測研究センターを設立して、流水観測レーダー施設を縮小、2005（平成17）年からの撤退を決定した。このことは北海道大学の事情によるものとはいえ、流氷研究者だけではなく、レーダーの情報に頼ってきた漁業者や、観光業者をはじめ地域の人々に影響を与えている。

北海道では、流氷や海洋に関する科学的知識を一般の人々に分かりやすく、楽しく学ぶ場を提供するとともに、流氷に象徴されるオホーツク圏域の自然と生活文化に対する理解を深めるために、1991（平成3）年、紋別市に北海道立オホーツク流氷科学センターを設置した。

また、紋別市では1986（昭和61）年以

オホーツクの流水は  
豊かな海を育てる



冬の訪れとともに、オホーツク海北部のシベリア大陸沿岸で最初の海水が生まれる。凍る範囲が次第に南へ広がっていき、流水はやがて、北海道のオホーツク海沿岸に近づいてくる。そして流水が接岸すると、沿岸は一気に厳しい寒気に覆われる。

流水はかつて、この地域に住む人々や漁業者にとっては邪魔者であった。流水の接岸した沿岸では漁ができないばかりでなく、浜が荒らされると漁業者たちから嫌われていた。しかし、その浜は、漁業ができないという負の結果ばかりではなく、雑海藻が除去されるため

昆布の着床がよくなるほか、流水の下には、種々のプランクトンなどが流水とともに到来して底魚などの餌になるなど、浜を豊かにしていることも分かってきた。

1987（昭和62）年2月、アラ

スカの油田開発に移動用乗物として開発された実験船は、世界初の流水砕氷船「ガリンコ号」と名づけられ紋別市で就航した。船首水面付近にある流水を砕く巨大なドリルで、沖合まで航行できる砕氷船は、冬の海の厳しさやその不思議を人々に伝えたのである。この「ガリンコ号」就航によって、北海道北東地域の新たな観光展開へとつながった。それまで、夏主体であった観光が、冬にも新しい魅力を持って現われたのである。その後、網走市でも新たな観光砕氷船が就航し、オホーツク海沿岸各地に、冬の観光客誘致に向けての努力が続いている。

それが続いている。

それとともに新しい冬の魅力が生まれてきた。1996（平成8）年に紋別市の沖合1kmに造られたオホーツクタワーは、海底7.5mから、流水の観察や流水下のさまざまな生き物の生態観察ができる施設である。流水の下の世界が初めて人々の目に触れ、海の中に住むいろいろな生物の生態や動きが関心を呼んでいる。その中の代表格は「クリオネ」である。巻貝の一種である「クリオネ」はその愛らしさで、多くの人々を魅了している。また、外からの観察だけではなく、新しい体験型観光とも言える流水の下へのダイビングも人気を呼んで、年々盛んになってきている。

このような新たな観光のきっかけを与えた初代「ガリンコ号」は1996（平成8）年3月に最終運航となり、現在は翌年の1月に就航した「ガリンコ号II」が活躍している。

降毎年2月に、世界各国の流水研究者が一堂に会する「北方圏国際シンポジウム」を開催しており、紋別市は、流水研究国際都市を宣言するなど「流水研究のメッカ」ともいえるまちになっている。

オホーツク海沿岸地域は、北海道の中では最も豊かな海である。それは流水のもたらした恵みなのであろうか。まだまだ自然界には解明されていないことが多いが、一時は「厄介者」と呼ばれた流水が、地元の人々の知恵と工夫で「オホーツクからの贈り物」と呼ばれるようになり、かけがえのない宝物となった。

## Data



### ●お問い合わせ先

[流水に関するお問い合わせ]

北海道立オホーツク流水科学センター事業課

Tel. 01852-3-5400

[ガリンコ号に関するお問い合わせ]

オホーツク・ガリンコタワー(株) Tel. 01582-4-8000

[全般的なお問い合わせ]

紋別市流水都市推進室 Tel. 01582-4-5300

# 謎に包まれたオホーツク文化



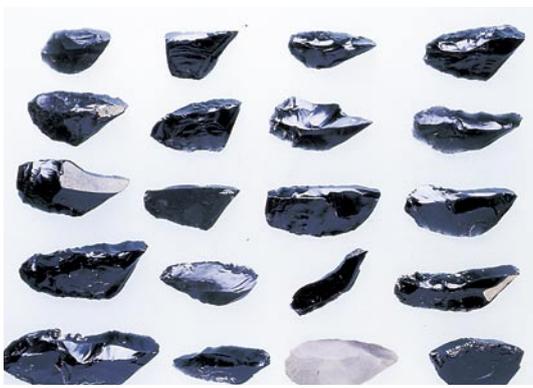
常呂遺跡（常呂町）

北海道の北東部には、南西部とは異なる文化をもつ遺跡が見られる。特にオホーツク沿岸の地域には、縄文、続縄文、オホーツク文化、アイヌ文化まで各時代の遺跡が分布し、白滝村など内陸部では、旧石器時代の特色ある遺跡が多く見られる。

その中でも、常呂川河口遺跡は、掘り出された遺構・遺物の数量と内容において突出している。擦文文化期の竪穴・土壇墓、オホーツク文化期の竪穴住居・土壇墓、続縄文文化期の竪穴住居・土壇墓・埋甕、縄文晩期の土壇墓、さらにこれらの遺構の下層に縄文後期・中期・前期の遺構が確認され、竪穴の窪みを利用したアイヌ文化期の送り場遺構など各時期の遺構が一带で確認されている。また、1949（昭和24）年以降に調査された縄文後期の朱円周堤墓（斜里町）も、その規模の大きさを群を抜いている。

流水の見られるオホーツク沿岸を中心に、5世紀から13世紀にかけて現われ、忽然と消えた人々がいる。早くから史跡に指定されたモヨロ貝塚に代表されるオホーツク文化を残したオホーツク人である。オホーツク人は、縄文人などとは異なった人々であり、その遺跡の分布は、サハリン南部から利尻・礼文、オホーツク沿岸、根室、千島に及んでいる。

オホーツク文化の特徴を少し取り上げて見よう。漁労において、同時代の続縄文人や擦文人が



黒曜石で作られた石器  
(白滝村)



朱円周堤墓  
(斜里町)

## Data



### ●お問い合わせ先

- モヨコ貝塚：網走市立郷土博物館  
Tel. 0152-43-3090
- 常呂遺跡：ところ遺跡の館  
Tel. 0152-54-3393
- 朱円周堤墓：斜里町立知床博物館  
Tel. 01522-3-1256
- 白滝遺跡群：白滝村教育委員会  
Tel. 01584-8-2963

使っていない大型の網を持ち(後世のアイヌ民族・ウィルトタ民族・ニヅフ民族も持たない)、ブタ・イヌを食用家畜として飼育し、海獣を多く狩猟していた。住居は、同時代の擦文文化と比較すると、およそ3倍の広さを持ち、六角形で、家の中には熊の祭壇がおかれていた。その家では、複数の核家族(一家族5人くらい)から形成された一団で生活していたものと思われる。

このようなオホーツク文化が、変容・消滅した原因は、擦文文化による影響があらうことは、「オホーツク文化から擦文文化へと変容を遂げつつある段階の文化」といわれる「トビニタイ文化」が、現在の網走と釧路を結んだ線の東側で見られることから推測されるが、いつどのようになされたのか、オホーツク人がその後どうなったか、そのルートとともに、いまだ謎に包まれている。

いまや世界の白滝といつてよい遺跡が、オホーツク海にそそぐ湧別川とその支流支湧別川の流域、白滝村にある。90カ所以上の旧石器時代の遺跡があり、「白滝遺跡群」と総称されている。白滝村は黒曜石の原産地であり、標高1147mの赤石山一帯には、アジアでも最大級で、埋蔵量数十億トンとも言われる黒曜石の露頭が見られる。そして、その周囲には、質量ともに豊富な遺跡がある。2万年前の後期旧石器時代の石器は、道内では渡島地方、道外では400km離れたサハリンで発見されており、また縄文時代には、青森三内丸山遺跡、北方ではアムール川の河口に近い遺跡でも確認され、東北アジア一帯で使われていたことが予想される。ロシアの共同研究者からも、白滝産黒曜石製石器製作の技術や流通の調査が提唱されており、注目されている。

## オホーツク文化研究の出発点

オホーツク文化の代表的な遺跡であるモヨコ貝塚は、大正期から米村喜男衛が、精力的な調査・保存活動を行い、オホーツク文化研究の出発点となった遺跡で、1936(昭和11)年、国の史跡に指定されている。

1941(昭和16)年、海軍基地建設工事の時、数百体の人骨が出土し、1947(昭和22)年からは、3回にわたり東京大学、北海道大学、網走市立郷土博物館の共同調査団により、貝塚の一部と竪穴住居跡敷基が発掘・調査された。ここで発掘された人骨は、北海道でそれまで知られている人骨とはタイプが異なり、現在、オホーツク文化を担ったオホーツク人と呼ばれている。



モヨコ貝塚 (網走市)

# 森に響く 「カンコーの汽車」の音

森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」は、東京・雨宮製作所で製造された初の国産11トン機関車で、道内では唯一の動態保存、すなわち動ける状態で保存されている歴史的文化遺産である。

「雨宮21号」が丸瀬布―武利意間の森林鉄道に配置されたのは1928（昭和3）年。以来、戦中から戦後にかけて、国有林から伐り出した丸太や生活物資を搬送してきた。町の人々は「雨宮21号」を「カンコーの汽車」と呼んで親しんだ。カンコーとは官行、国の汽車という意味である。

1961（昭和36）年、森林鉄道は廃止になり、「雨宮21号」はスクラップという寸前に、地元の人々の要望が実を結んで、北見管林局は丸瀬布町へ払い下げを決めた。

同年5月13日、サヨナラ運転。

ところが1969（昭和44）年春、林野庁の意向で「雨宮21号」は群馬県へ移されることに決まった。驚いた町長や有志のメンバーは、管林局に対して文書で「地元保存」を要請し、700人の署名を集めて、

「木材で走る機関車を残してほしい。森林愛護思想を高める意味からも、ぜひ」と訴えた。

林野庁は「雨宮21号」を断念し、抜き打ち的に置戸町に保存している機関車を群馬県に移すことにした。こうして「雨宮21号」は1976（昭和



木材を運搬していた当時の雨宮21号

51)年、丸瀬布町に正式に譲渡された。鉄道廃止からすでに15年が経過していた。

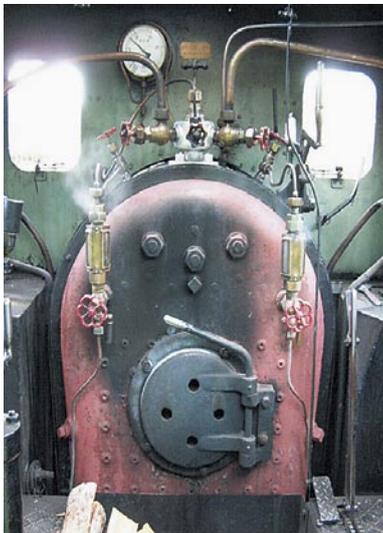
町は「雨宮21号」を札幌に運んで復元、整備する一方、市街地から9 km離れた同町上武利に森林公園いこいの森を造成し、森林鉄道の走る緑と渓谷のマチ、をキャッチフレーズに、8の字形の一周軌道を敷設するなど着々と準備を進めた。

いこいの森の周辺にはオートキャンプ場や昆虫生態館、郷土資料館なども設置され、温泉施設もできた。

1982(昭和57)年5月1日、「雨宮21号」は、ポーツ

懐かしい汽笛を響かせて走り出した。丸瀬布の人たちはその雄姿に歓声を上げた。

2001(平成13)年元旦、「雨宮21号」は積雪に埋まった森林の中を、白い煙を吐きながら豪快に走り抜けた。「雨宮21号」と「21世紀」の到来を引っかけた記念運行に、人々は感激の面持ちだった。



運転室

## 有志の情熱が果たした動態保存

「カンコーの汽車を何とかして残したかった」と述懐するのは丸瀬布町の郷土史研究家、秋葉実さんだ。

秋葉さんが「雨宮21号」のスクラップ処分を知ったのは1956(昭和31)年秋。毎年スキー場の麓で開く有志らの「山賊会」という宴会の席上だった。役場職員から「雨宮21号」は10万円ですくらップになる、と聞かされ、酒の勢いも手伝って有志らが、

「俺は2万円出す」

「5千円ならすぐでもいいぞ」

と言い出して、あつという間に資金の目算がついた。

ところが機関車だけ買っても、機関庫もなければ用地もない。秋葉さんは翌朝、町長を訪ねて、「機関車を寄付するから、保存策を考えてほしい」と頼んだ。

町長はその熱い心情にうたれ、「雨宮21号」の譲渡にかけずり回った。秋葉さんは地元民の家々を歩いて署名活動をした。紆余曲折の末、「雨宮21号」の動態保存が決定した。

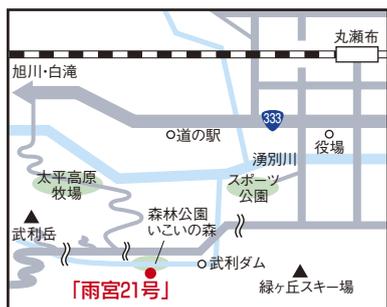
1982(昭和57)年5月1日、黒い機関車がまるで生き物のように力強く走り出した。

「あの日の喜びは、生涯忘れられない」と秋葉さんは語る。



## Data

4月末～10月末の土、日、祝日、夏休み期間に運行



●お問い合わせ先  
丸瀬布町商工観光課 Tel. 01584-7-2211

# 霞の海原に ゆらめく三角帆



エビの尻尾のように根室水道に突きだした野付半島に囲まれた浅い湾が尾岱沼である。野付風蓮道立自然公園に含まれている。この浅い湾では打瀬舟(うたせぶね)という特殊な帆掛け舟がホツカイシマエビ獲りに使われている。水深が浅くて、しかもアマモなどの海藻が多い湾ではスクリューが使えないので帆を使う漁法が考えられた。帆掛け舟は海藻や海藻を傷めないから、それらを食料とするハクチョウなどの保護のためにも意義は大きい。

尾岱沼を囲む野付半島はごく低い砂嘴(さし)で、その先端部にはかつて集落もあったというが、年々砂州が沈下し続けて、今ではトドワラ(楸原)と呼ばれたトドマツの枯木の立ち並ぶ景観も少なくなってしまった。これは少々寂しいが、一風変わった荒々しい光景で有名だった。

砂嘴の付け根近くオンニクルにあるナラワラ(檜原)が辛うじて残っていて面白い風景をみせているが、樹形の点ではトドマツなどの針葉樹に比べると凄みがなくて到底、及ばないのが惜しい。このナラワラも地盤沈下や湾内流の浸食による海水の侵入での立ち枯れである。

砂嘴の岸边や潮溜まりにはアッケシソウ

(サンゴソウ)、ウシオツメクサ、ウミミドリ、オオシバナ、ハマシオンなどの塩生植物の群落がある。砂州にはハマナス群落が広くみられるほか、チシマフウロ、エゾフウロ、オオハナウド、エゾリンドウ、キバナノカワラマツバ、サワギキョウ、チシマアザミ、トウゲブキ、シコタンタンポポ、キオン、エゾカンゾウ、クロユリ、クルマユリ、マイズルソウ、カラマツソウ、センダイハギ、ハマニンニク、ハマベンケイソウ、クサフジ、エゾカワラナデシコ、コケモモ、ガンコウランなどがいわゆる原生花園を作り上げている。一部にはミズゴケをとまなう淡水の湿地もあって、そこにはツルコケモモ、ムジナスゲ、チシマガリヤス、ナガボノシロワレモコウなどがみられる。

湾内は波が静かでほとんど湖に近い環境だからオオハクチョウ、オナガガモ、マガモなどもやってくるし一部は越冬もする。日本では数少ないアカアシシギの繁殖地でもある。海岸草原にはユキホオジロ、シマアオジ、ノゴマ、ヒバリ、ベニマシコ、オオジュリン、シマセンニュウ、ハクセキレイ、センダイムシクイがみられる。

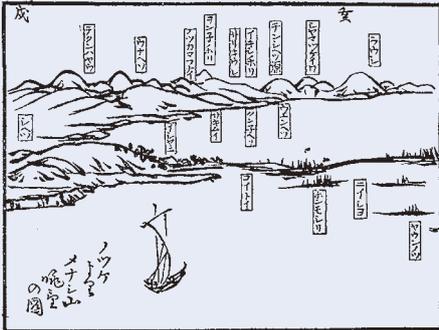
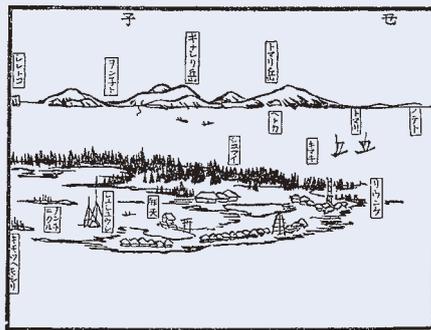
砂嘴は付け根から先端まで26kmある。これは砂嘴としては日本で一番長い。根室水道に

## 江戸時代には歓楽街も!?

国後島にもっとも近い要衝として1799（寛政11）年には幕府によって野付に通行屋が設けられた。19世紀初めには有数の練漁場として根室場所の番屋からの出稼ぎの人で賑わったという。『東蝦夷日誌』に掲げられている松浦武四郎の絵図には、シュシュウシ、リウンケ、キマキ、シュフイなどの地名が書き込まれ、弁天社殿を含めてかなりの家々の立ち並ぶ光景が描かれている。ここにはキラク（喜楽か?）と呼ばれる歓楽街もあった、という話も伝えられる。通行屋の土塁、賑わった頃の畑の跡などが残っている。この野付場所の経営に力を注いだ秋田出身の加賀家文書が別海町郷土資料館附属の加賀家文書館に収められている。

野付半島の付け根の部分は標津町だが、それから先の部分は別海町に属する。ネイチャーセンターには半島と尾岱沼の自然や歴史が展示・紹介されている。トドワラ

まで夏季には馬車が動いている。また、トドワラから尾岱沼港まで、砂嘴の最先端（野付岬）のアラハマワンドと尾岱沼港までを遊覧船で往復することもできる。



松浦武四郎『東蝦夷日誌』



夕陽に輝くトドワラの風景



野付半島全景

一番突き出したところに野付岬灯台がある。その目の前に国後島が横たわる。北方領土にもっとも近いところである。

打瀬舟は、小型底引き網漁法という漁のやり方で、先にも述べたように、浅くて、しかも海草が多くてスクリューが使えない海での漁法である。名産のホッカイシマエビは、ここではアマモという海藻の中にいるから、この漁法がもっとも有効なのだ。アマモは海藻ではなくて海中に生えているが顕花植物である。和名はリュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ（竜宮の乙姫の元結いの切り外し）と言って、植物の名前としてはもっとも長い。

漁は毎年、春は6〜7月、秋は10〜11月の短い期間のみ行われる。湾に浮かぶ白い三角形の帆が霞にかすんでゆらめく姿は、野付湾の風物詩としても知られている。



●お問い合わせ先  
 別海町商工観光課 Tel. 01537-5-2111  
 別海町観光協会 Tel. 01537-5-2111  
 別海町郷土資料館 Tel. 01537-5-0802  
 野付半島ネイチャーセンター  
 Tel. 01538-2-1270

# 「美人の湯」に咲く蛍の光

温泉天国・北海道。たくさんの温泉がある中で、世界にもめずらしい北海道ならではの成り立ちと成分をもつ温泉がある。モール温泉だ。

モール温泉は、泥炭を通して湧出するもので独特の茶褐色の湯が特徴である。ドイツのバーデンバーデンにあるものが有名で、日本では、北海道の十勝に代表してみられるほか、石狩平野や豊富町などでも湧出している。呼び名のモールは「Moore」のドイツ語読みになむもので、泥炭のことを意味している。主成分は植物性腐食質で、鉱物成分より植物成分が多いのが他の温泉との違いだ。また、熱源は、地熱に加えて地下での植物の堆積物による発酵熱と考えられている。

北欧やロシアでは、泥炭の微粉末を温水中に混ぜて入浴するそうだが、十勝川の場合、天然にこれらの泥炭質の可溶成分を含んで湧出している。この主成分はフミン質あるいはフミン酸といい、美容にも効果があると言われている。人体皮下浸透度が非常に高く、短時間で身体の上まで暖まり、さらに植物性でまろやかなため皮膚を刺激せず、入浴後は肌がスベスベすることから人気が高く、十勝川温泉ではモール温泉を「美人の湯」と呼び親しまれている。

十勝川温泉はかつてアシの生い茂る湿地帯に湧出し、そこに点在する沼は、厳寒の冬になっても凍ることなく、鹿や野生の馬などが傷を癒しに来

たと言われている。『十勝川温泉の歴史』（帯広百年記念館博物館ボランティアの会）によると、本格的な温泉利用は、1901（明治34）年頃に依馬喜平が、自然に湧いたぬるま湯を利用した大きな1m四方ほどの露天風呂を作り、近所の住民とともに利用したのが始まりとされている。温度が低かったために加熱して利用していたようだ。

その後、1911（明治44）年に本別出身の前田友三郎が簡単な建物を建てて、いわゆる湯治宿の経営を始めた。前田は1913（大正2）年に、当時帯広にあった十勝館という建物を買収し、この土地に総2階建て、延べ70坪の本格的な旅館を建て、経営を始めた。この建物は「風呂に入るだけで2銭もとられた」と言われるほど、当時としては豪華なものであった。これが今の笹井ホテルの前身である。

1928（昭和3）年には、雨宮駒平が温泉宿を創設した。雨宮は、客の誘致を図るために、乗合自動車の運行を計画。1930（昭和5）年、ようやく許可をとり、フォード28年型の大型乗用車を買入れ、帯広から一日4往復の定期運行を始めた。当時は雨宮温泉と呼ばれ、一般的にはあまり知られていなかったが、小樽新聞で広く全道から選定した5つの名泉の中に、将来非常に発展性があるということでの温泉が入った。

1931（昭和6）年、林豊洲が十勝川沿いの



地点で次々とボーリングを行った。豊洲は現在の十勝毎日新聞社の基礎を築き、郷土の産業の進展、文化の振興、スポーツの普及などに大きく寄与した人物である。特に観光開発の必要性を説き、巧みなPR活動によって然別湖や糠平湖など十勝の景勝地が大雪山国立公園に編入された。また、観光宣伝のために自ら歌も作った。「ランランラン トセカネガフル」で有名な『十勝小唄』を芸者に歌わせ、十勝を全国的に宣伝しようとした。この歌は、今でも歌い継がれる数少ない郷土民謡のひとつである。

豊洲は1934（昭和9）年、今の観月苑付近に45度の適温を持つ温泉を掘り当てた。これは今の泉温、泉質と変わらないものであった。この温泉地帯で初めて、加熱せずに使える温泉の湯を使い、和風建築の観月苑を建てた。これに先だって豊洲は当時「雨宮温泉」と呼ばれていたこの温泉を「十勝川温泉」と名づけることを提唱した。

こうして十勝川温泉には笹井、雨宮、十勝川、

## 地域の新たな取り組み

かつて、北海道各地の河川や湖沼、田んぼでもホテルは普通に見られていた。十勝川地区にもたくさんのおホテルが生息していた。近代化の波により、各地でだんだん生息数が減少し、十勝川地区では1990（平成2）年の夏を最後にホテルの姿を見ることができなくなった。水田の減反や農薬の使用などが原因と見られている。

かつては普通に見られていた初夏の光景を呼び戻したい。そんな思いから、2003（平成15）年11月に十勝川温泉では、ホテルの住めるせせらぎを手造りで完成させ、ホテルの幼虫と餌となるカワニナを放流した。

このせせらぎには「モール温泉水が利用され

ている。モール温泉には、カワニナの餌となる珪藻類に欠かせないミネラル分が多く含まれていることから、ホテルは順調に生育し、2004（平成16）年6月末から7月下旬まで毎日ホテルの鑑賞会が開催され、多くの観光客や地元住民の目を楽しませた。

十勝川温泉観光協会やこのプロジェクトを支えるボランティアの方々のおかげで、ホテルを呼び戻すことによって、環境の大切さを多くの人たちが考えていきたい。それと同時に、このモール温泉が大切な資源であることをきちんと私たち自身が再認識し、多くの人たちに知ってもらい、次の世代にも確実に伝える取り組みを進めたい」と語る。

観月の4つの旅館ができ、周辺には料理屋や、雑貨店などが開業し、温泉街が形作られていった。戦後、さらに数件の宿が新しく開業し、現在では、年間130万人以上の観光客が訪れる温泉地となっている。

## Data



●お問い合わせ先  
 十勝川温泉観光協会 Tel. 0155-32-6633  
 音更町企画課 Tel. 0155-42-2111

# 延長7キロの 桜並木に 1世紀の 時が舞う



静内二十間道路の桜並木は数ある桜並木の中で一際、異彩を放っている。牧場の中をおよそ7kmほど真っ直ぐに走る道路もざらにはないが、その幅が二十間つまり36mの敷き幅だから並ではない。もっとも道幅いっぱい車が走れるというわけではなく、今は中央の道路に加えて左右に副道があり、これを併せるとまさに二十間になるのだ。

この二十間道路の両側を飾る桜並木の大半がエゾヤマザクラである。その数、平成17年現在でおよそ3000本。

場所は静内町から北東へ約7kmの台地上で、なぜ、こんなところにこうも壮大な桜並木かというと、ここはもともと、御料牧場つまり皇室の牧場が置かれていたところで、そのいわば行啓道路を飾る並木としてしつらえられたのだ。

記録によると1872（明治5）年、当時開拓次官だった黒田清隆が新冠、静内、沙流三郡にまたがるおよそ7万haの牧場を開設、野生馬2262頭を放牧したのが始まりだという。その後、1877（明治10）年にエドウィン・ダンによって面積を縮小して設計し直され、近代的牧場に生まれ変わった。この牧場は新冠御料牧場と呼

ばれて皇室の牧場として経営され、貴賓の宿舎として龍雲閣が建てられた。1911（明治44）年には大正天皇（当時皇太子）、1922（大正11）年には昭和天皇（当時皇太子）が宿泊、伊藤博文もここに絶筆といわれる七言絶句の書を残している。龍雲閣にはこの他にも狩野探幽の作といわれる屏風「牛馬の図」や多くの賓客らが残した馬具や食器などが保存されている。

御料牧場は第二次世界大戦後に農林省管轄となり、一部は北海道大学実験牧場に移管された。

二十間道路ができたのは1903（明治36）年で、その後1916（大正5）年から約3年を費やしてエゾヤマザクラなどが植えられて現在に至った。道路本線だけではなく枝道にも並木がつけられているから実際には総延長はもっと長い。長さでは日本有数だろう。

特徴的なのは桜並木の外側にトドマツが列植してあることで、これは風除けのつもりだったらしいが、常緑を背景として桜がまことによく映える。もう一つは、背景が広々とした牧場で、日高の馬がのびのびと駆け回っている。これらは二つとも他にはない効果的な演出である。

## Data



- お問い合わせ先  
静内町経済部商工労働観光課  
Tel. 0146-43-2111(内線176・177)  
静内観光テレホンサービス  
Tel. 0146-42-4000  
静内町観光情報センター「ぼっぼ」  
Tel. 0146-42-1000

昭和20年頃の二十間道路。この荒れた土の道に春、桜が咲き並ぶ姿は今は違う美しさがあったに違いない。桜の木々はまだ低いことが分かる。

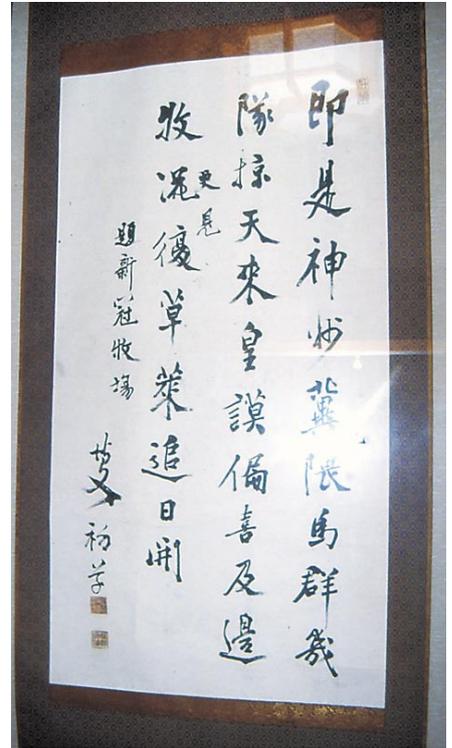


龍雲閣と伊藤博文の絶筆といわれる書(下)

## 地元の人々が守り育ててきた「道」

北海道では5月の黄金週間の頃に桜の季節を迎える。二十間道路の桜並木は1964(昭和39)年に第1回しずな桜祭りが行われて以来、桜の季節には毎年、20万人以上の人たちが集まるようになった。ジンギスカンやバーベキュー、阿波踊りなどのイベントが咲き誇る壮大な桜並木の下で行われ、思い思いに長い冬を終えて訪れた春を楽しむ。1986(昭和61)年には「日本の道百選」(建設省)、1987(昭和62)年には「北海道二十景北の彩時記」(北海道郵政局)、1988(昭和63)年には「北海道まちづくり100選」(同実行委員会)、1990(平成2)年には日本さくら会によるさくら名所百選の一つにも選ばれた。

また、1993(平成5)年には「北海道まちづくり100選ふるさとの魅力の発掘部門」(同実行委員会)、1994(平成6)年には読売新聞社の「新・日本街路樹百選」にも選ばれている。一方、地元のボランティアや高校生の協力により、沿道にコスモスを植える取り組みも行われている。春には桜を、秋には秋桜を愛でようという粋な取り組みだ。1903(明治36)年に行啓道路として開かれてから100年。その間、地元の方々がこの桜並木を愛し、成長を願って手入れを続け、守り育ててきたことにもう一度、感謝の意を表したい。



日本の桜並木の大部分はソメイヨシノである。エゾヤマザクラは山桜系だから、花盛りに葉も出て開いてしまうのと、花が紅色がかっているから、どうしても少し地味になる。それはそれで風情があるのだが、明るいソメイヨシノを見慣れた人には派手やかさが足りない、という人も少なくない。山桜系の並木というのはよそにはないから、その点でもユニークな桜並木ということができる。

# 大火と函館商人の 進取性が生んだ「街」

歴史都市のおもしろさは、町がたどってきた時の流れが、建物や街路の細かなつくりの変化に堆積し、それを足と目で読みとっていくところにある。函館のような港町であれば、海や坂、山が加わって、一層くっきりと目に映えてくる。

函館は北海道への玄関口であり、日本が近代へと踏みいった歴史の玄関口でもあった。いまは内陸部へ大きくひろがった函館市だが、その原点は函館山麓の西部旧市街にある。旧市街の中央にひととき幅広く通された坂道があって、基坂（もといざか）と呼ばれている。「基」は文字通り函館の原点を記念してつけた名称だ。

基坂の下端には、1859（安政6）年、国際貿易港としての開港と同時に運上所、後の税関が設けられた。坂を登りつめたところには、旧函館区公会堂が華やかな姿を見せているが、かつては幕府の奉行所があった。1803（享和3）年、坂道の真正面に建てられた役所である。時代が明治になって、開拓使函館支庁、函館県庁、次いで北海道庁の支庁に看板が変わった。1909（明治42）年に建てられた函館支庁、のちの渡島支庁舎が残っている。いまはあたりが元町公園として整備され、庁舎は位置を少し脇に移して観光案内所になっている。

基坂はこのように幕政時代の函館の原点を象徴しているが、原点ははるか中世にさかのぼる。函

館（昔は箱館と書いた）のルーツは、箱のように四角な館＝城砦だったという。館の位置は基坂の現在の市立病院跡のあたりだったとされている。基坂が通される前は、海べりの下町とは崖でへだてられた高台になっていて、海を見わたす絶好の立地だった。

海べりの道筋はいまの市電通りにあたる。船着き場を背後にして問屋が軒を連ねていた。箱館港町は18世紀末には、松前、江差とならんで「松前の三湊」と謳われた。ただその中心は、古くは岬寄りの弁天町にあったが、少しずつ末広町（昔の町名では内澗町）へ、さらに大正・昭和期には末広町の十字街から現函館駅前一带へと移っていった。

末広町の旧金森洋物店（1880年／道指定有形文化財）は、このあたりが中心だった時代を代表する。1878、79（明治11、12）年と続いた大火のあと、開拓使の指導で防火造市街の建設が進められた。末広町街路は防火造商家がずらりと並ぶ街並みになったが、同じ防火造でも伝統的な土蔵造りが一般的だった中で、金森洋物店を中心としたこの一面だけは多くがれんが造で建てられた。開拓使がれんがを製造し、その使用を奨励したことを受け入れた、函館商人の進取性がよく表われている。

建物の表面は赤れんがではなく、白漆喰を塗っ



### 函館漁港・船入潤防波堤

イカ釣り漁の基地としても知られている函館漁港（入舟漁港）には、1899年に完成した石積み防波堤が現存している。監督技師は小樽港の建設で有名な廣井勇博士で、建設にあたっては、旧砲台（弁天岬台場）解体の際に発生した石材を利用している。当時をしのばせる貴重な土木遺産といえよう。

て仕上げた。旧金森洋物店では、壁の隅角や窓まわりに石積み形やアーチ形をつくりだして、文明開化時代らしいデザインにされた。このれんが・白漆喰は函館のお気に入りになったようで、明治中期の太刀川商店（1901年／重要文化財）はこの手法で、重厚な土蔵造りの意匠を主としながら、よく見るとアーチのような洋風も取り込んでいる。明治末の旧金森船具店（1911年／現金森美術館）はルネサンス風のデザインでつくられている。

函館は大火の町として知られる。1934（昭和9）年の大惨禍で最後になったが、先にふれた明治11、12年のあと、明治40年、大正10年と市街の中枢を焼き尽くす大火に襲われた。そのつど街は立派に再興されてきたわけだが、結果として焼失域ごとにそれぞれの時代の特色が街並みに刻印されることになった。

西部市街は大半が1907（明治40）年の大火で失われた後、明治末から大正初めにかけて再興された。ただし弁天町の方は一部が焼失をまぬがれ、わずかではあるが大火前に建てられた木造の建物が残されている。また元町・末広町のあたりから宝来町方面は大正10年に焼けていて、宝来町「銀座街」はこの大火後、防火帯として再興された。それも当時は日本でも最先端の鉄筋コンクリート、同ブロック造りで建てられた。



### 街の主役と脇役たち

西部の街並みを歩きまわると、まるでスベクタクルでも観ているかのように、明治・大正・昭和各時代の衣装をまとった名優たちが次から次と登場してくる。主役も脇役もそれぞれに個性豊かな。

主役の一番手は旧函館区公会堂（1913年／重要文化財）であろうか。鮮やかな青みと黄色というペイントが意表をつく。正面二階のベランダは外見も華やかだが、ベランダに出て基坂を通して海を見下ろす眺望がなんとも豪華だ。

近くには、ロシア正教会のハリストス正教会復活聖堂（1916年／重要文化財）がある。エキゾティックな役柄で人気度ではトップかもしれない。そのすぐ下にはゴシック様式のカトリック元町教会（1924年）があるし、東本



民家の保存に向けて市民と行政が連携しながら取り組みを進めている。

願寺函館別院の大屋根が見えている。東本願寺の伽藍は日本で最初の鉄筋コンクリート寺院としても知られる。さまざまな宗教が肩を寄せ合っている姿は、開放的な開港場の気風をよくあらわしている。国際的といえば、旧イギリス領事館（1913年／現開港記念館）や旧ロシア領事館（1908年）がある。中華会館（1915年）も忘れるわけにはいかない。こうした主役に混じる脇役がまたすごい。和洋さまざまな商家や住宅がびっしり建っている。ユニークなのが一階は格子戸の伝統的な構えなのに、二階が下見板ペイントに縦長のガラス窓をおき、立派な軒飾りをまわすという上下和洋折衷デザインの町家である。庶民の工夫をしゃれた姿で表わした建築様式といってよい。

### Data



●お問い合わせ先  
 函館市教育委員会文化財課  
 伝統的建造物群保存係  
 Tel. 0138-21-3456  
 函館市観光課宣伝係  
 Tel. 0138-21-3323

道南一帯に残る  
激戦の傷跡

箱館戦争は1868（明治元）年10月20日の旧幕府脱走軍の蝦夷地侵攻に始まり、翌69年春の新政府軍の猛反撃により、旧幕府脱走軍はついに降伏、5月18日の五稜郭明け渡しで終焉を告げた。戊辰戦争の最後の戦いである。

戦争の地域は道南一帯に及び、随所にその遺跡、遺構が見られる。明治元年の戦いは榎本武揚率いる旧幕府脱走軍艦隊が森町鷺ノ木に上陸した地点から始まり、五稜郭へ向け進撃する途中、激戦となった七飯の峠下や大野、土方歳三らが進撃した川波峠、戦火に覆われた松前藩の居城・福山城下、松前藩の新城、厚沢部の館城、開陽丸が座礁沈没した江差町の鷗島など、その戦闘の跡をたどることができる。

五稜郭は蝦夷島仮政権の本営地となったところで、土官以上の入札により総裁に榎本、副総裁に松平太郎を選出した。榎本は朝廷にたいして最後の「嘆願書」を提出した。

だが新政府はこれを握りつぶし、賊徒追討を決める。

決戦を覚悟した榎本は、急ぎ五稜郭の北東側の東照宮を準備するために四稜郭を造成し、さらに権現台場や千代ヶ岡陣屋、弁天岬台場、松前、江差などの守りを強化した。

1869（明治2）年4月、新政府軍は反撃を開始し、乙部の海岸から上陸した。海岸近くに「官

軍上陸の地」碑が立っている。新政府軍は一気に江差を突破し、松前を奪い返したうえ、福島、木古内、上磯などで戦闘を展開した。大野の二股口は箱館に通じる難所で、もともと激戦となった場所である。

新政府軍はじりじりと五稜郭へ迫り、5月11日に箱館総攻撃をかけた。この日、土方歳三が一本木関門を突破した後に戦死した。弁天岬台場は降伏し、16日、千代ヶ岡陣屋は壮絶な戦いの末に陥落した。その夜、榎本は切腹しようとして果たせず、ついに降伏を決意した。18日五稜郭明け渡し。

箱館五稜郭祭りは毎年、この明け渡しの日に近い土日に開催される。圧巻は両軍のパレードだ。マーチに乗って葵の紋の旗を押し立てて旧幕府脱走軍、つまり蝦夷地仮政権軍が登場する。黒いフロックコートに身を固めた榎本武揚が松平太郎や大島圭介、荒井郁之助らを従えて進む。ここでも人気は「誠」の旗をひるがえす新選組の土方歳三らだ。

続いて新政府軍総裁の黒田清隆以下の武将が赤、黒、白のシャグマをかぶり、威風堂々と進む。酒樽の行列は、榎本がオランダ留学時代に学んだ「海津全書」を兵火に焼くのは忍びないとして黒田に贈ったのにたいする黒田が返礼の酒である。

途中、大砲がドーン、と轟音を響かせ、沿道に埋めた人々を魅了する。

## もう一つの「碧血碑」

函館市谷地頭町の函館山山腹に建つ「碧血碑」は旧幕府脱走軍の戦死者を祭る慰霊碑で、1875（明治8）年に生き残った旧幕府脱走軍兵らや同志により建立された。碧血の意味は中国の故事にある「義に殉じた武人の血は死後3年を経て碧玉と化す」から取った。

ところで碧血碑はもう一つ、厚沢部町稲倉に現存する。ただしこちらは官軍も賊軍もない悲しみの碑である。

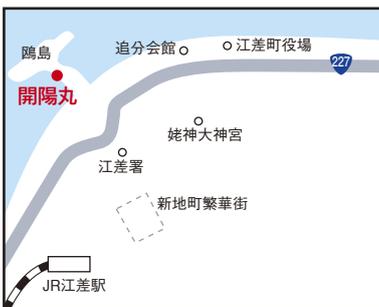
1868（慶応4年、9月に明治と改元）年8月、松前藩内で正義隊によるクーデターが起こり、政権が変動したのを機に、厚沢部に新城の建設が始まった。本丸を中心に柵を回し表門、北門をつけただけの新城・館城ができたのは10月20日。

ところが皮肉にもこの日、榎本武揚率いる旧幕府脱走軍艦隊が鷲ノ木から上陸した。五稜郭を奪った旧幕府脱走軍は捕虜の松前藩士を使者を立て、松前に「共存」を伝えた。だが松前藩は使者を斬り捨てた。激怒した榎本は松前攻撃を命じ、あつという間に城は落ちた。

藩主の徳広はいち早く新城の館に逃れたが、旧幕府脱走軍はすかさず館へ向かい、厚沢部の鵜と稲倉石で激戦になり、両軍多くの死者を出した。その挙げ句、館城は落城した。藩主らは熊石まで逃れ、そこから船で津軽へ落ち延びたが、藩主は喀血死。側近は自害と偽りの書面を新政府に提出して体面を保った。

鵜山道を開いた厚沢部の麓長吉は、付近に放置されたままの死体を、敵も味方もなく一か所にまとめて合葬した。松前藩士の末裔が碧血碑を建て、改めてここに埋葬したのは1919（大正8）年のことである。

### Data



#### ●お問い合わせ先

函館市教育委員会文化財課文化財係

Tel. 0138-21-3463

江差町郷土資料室 Tel. 01395-2-1047

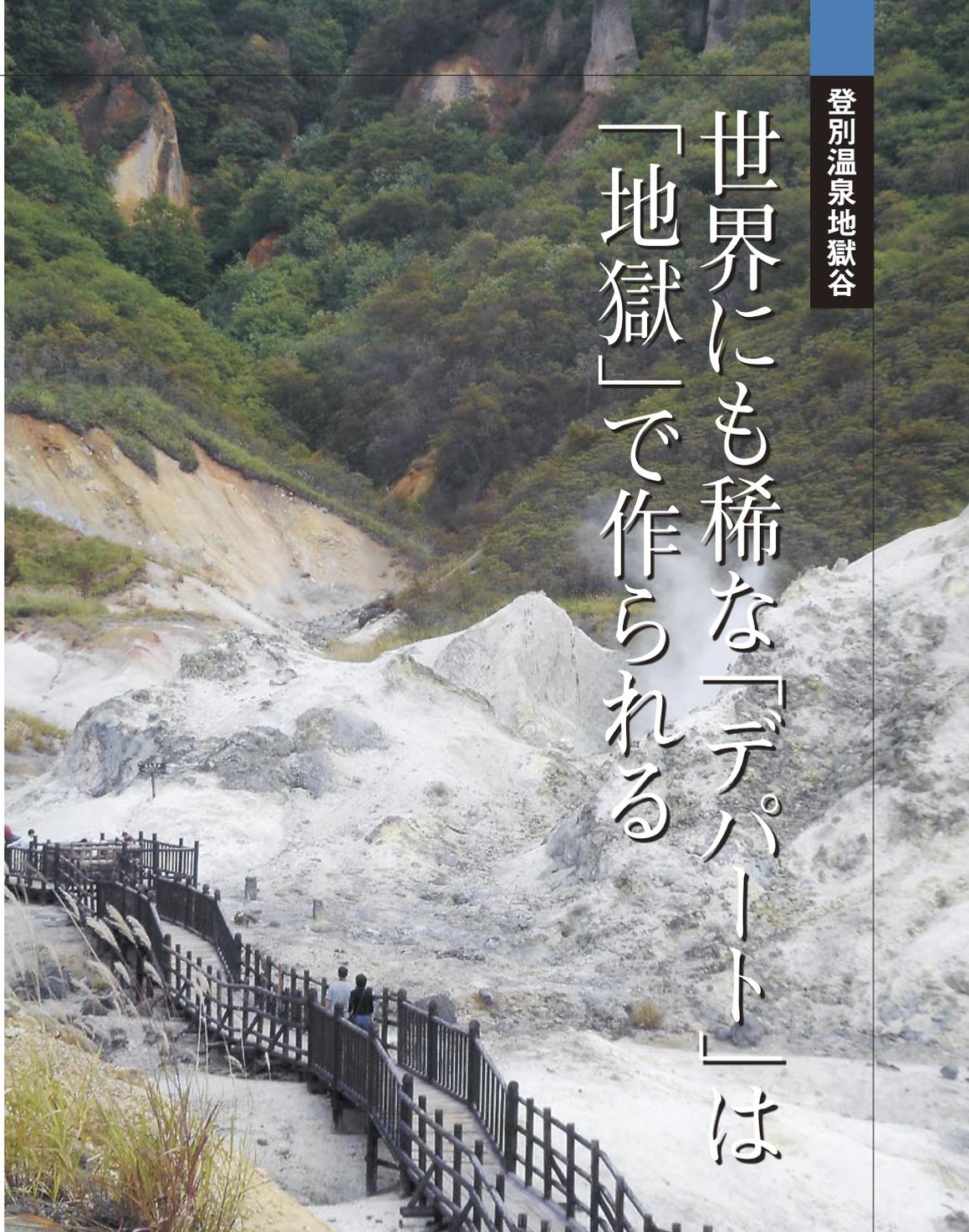
(財)開陽丸青少年センター

Tel. 01395-2-5522

「開陽丸」は徳川幕府がオランダに発注した機帆走軍艦。1867（慶応3）年に日本へ到着。翌1868（明治元）年、榎本率いる旧幕府脱走軍が江差攻撃のため進んだが、暴風のため江差沖で座礁、沈没した。1975（昭和50）年から始まった引き揚げ作業によって発掘された遺物は3万3000点近くに達し、それらは日本初の海底遺跡に登録された。1990（平成2）年、江差町に実物大の開陽丸が再現され、さまざまな資料や遺物が補完・展示されている（2004年の台風18号の影響により現在は休艦中・2005年3月現在）。



# 世界にも稀な「デパート」は「地獄」で作られる



真正面にのこぎりの歯を立てたような赤茶けた岩がむき出しにそそり立ち、谷底には無数の噴気孔や湧出口。火山ガスが噴出する姿や、むせかえるような硫黄臭は、まさに地獄の光景だ。

「地獄谷」は北海道を代表する温泉地・登別温泉最大の源泉で、約1万年前、活火山が噴火した時に生まれた爆裂火山口跡である。長径450m、面積11haの谷底には、大地獄をはじめ、昭和、

剣山、大、竜巻、虎、血の池、硫黄、御初、奥地獄、鉛、乙女、鉄砲、湯ノ花、鉄泉、千畳の名のついた大小15の地獄があり、その凄さを物語っている。ここから成分の異なる湯が毎分3000ℓも噴き出し、温泉街の旅館やホテルに給湯される。登別温泉の源泉は地獄谷の他にもあり、温度は45度から90度と高温で、1日1万トンの温泉が自然湧出している。最大の特徴は、硫黄泉や食塩泉、鉄泉、明ばん泉など11種類もの温泉が湧出していることで、「温泉のデパート」と呼ばれる所以だ。このことは世界的にも珍しく、古くから多くの研究者が足を運ぶ。

「ノボリベツ」という小川有り、この川上に温泉湧き出て、流れ来るため白粉と紺青をかきたてるが如し、一日も水底の見ゆる事なし」。これは約210年前、蝦夷地を探検した最上徳内の「蝦夷草子」に描写された登別の風景である。川底が見えないほど温泉水が流れ込む様子から、当時から豊富に温泉が湧き出ていたことがわかる。また、登別の語源はアイヌ語の「ヌプルベツ（白く濁った川・色の濃い川）」に由来し、温泉街を流れる川をアイヌ語で「クスリサンベツ（薬湯そこを通過して浜に出る川）」と呼ぶ。古くからアイヌの人々もこの温泉を利用していたことが伺える。

1858（安政5）年には、「北海道」の名付け親でもある探検家の松浦武四郎が訪れた記録が

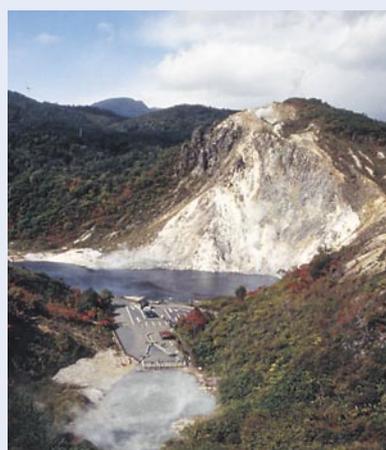
## 温泉だけではない登別の魅力

地獄谷の周辺には活火山地帯だからその見所が多い。地獄谷の北東に位置し、周囲約1kmのひょうたん型の沼「大湯沼」。最深部は約25mあり、地底から湧き出た130度の熱湯によって温められ、灰黒色をしている。

また、大正時代に起こった小爆発で生まれた「大正地獄」は、直径10mと小さいながらも、10日間程度の周期で湯の量が増減する間欠泉で、今も89度の湯が激しく噴き出し煮えたぎる。湯量が減ったときには地の底から不気味な地鳴りが聞こえるという。湯の色が白、青、黒、ピンク、グレーなど7色に変わることも知られている。

また、地獄谷の周辺は自然の宝庫でもある。「日和山」は今も頂の裂け目から白煙が立ち上がっているが、エゾリンドウ、ガンコウラン、イソツツジなどの高山植物が群落を作っており名所としても人気が高い。

登別市では、こうした1万年前の火山活動がくれた「地獄谷」の恩恵を多くの方々にも堪能してもらおうと、その魅力を伝える取り組みを進めている。地獄谷や大湯沼の周辺には自然探勝路が整備され、地獄谷の展望台では5月から10月までの間、観光ボランティアの市民が待機し、希望に応じて案内をしてくれる。ボランティアガイドの説明を聞きながら、地獄の種類や火山性地質の影響を受けた特殊な植物、クマゲラやコミミズクなど数多く生息する野鳥を楽しむことができる。



大湯沼



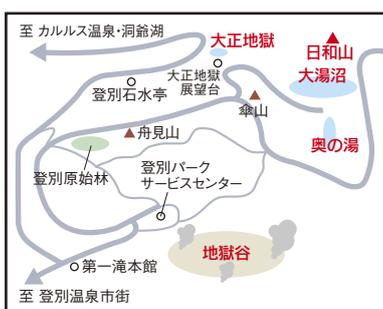
大正地獄

ある。当時は険しい山道しかなく、訪れる人は稀だったらしい。

この温泉地に道をつけたのは、近江商人・岡田半兵衛である。地獄谷の硫黄採掘のために道を開き、湯治人止宿場という共同浴場を作った。さらに、明治維新の混乱期には、皮膚病に苦しむ妻のために山道を分け入り温泉にたどり着き、妻の治療を始めた滝本金蔵が、その効果に感動し、明治政府公認の「湯守」の許可を取り付けた。大工の腕を生かして湯宿を設け、けもの道に私費を投じて道路を整備し、客馬車の運行なども手がけたという。妻を思う気持ちからいまの登別温泉が生まれたエピソードとしても有名である。

その後、登別温泉は、1905（明治38）年に日露戦争傷病兵の保養地に指定され、「名湯」として全国に名が広まったと言われる。

### Data



#### ●お問い合わせ先

登別市観光経済部観光課

Tel. 0143-84-2018

登別市総務部企画課

Tel. 0143-85-1122

登別観光協会

Tel. 0143-84-3311

# 四季を通して 「緑のダム」に あふれる美しさ

ブナは温帯の代表的樹種として世界の北半球中緯度地方に広く分布する。日本のブナ林は東北地方に多く、白神山地の原生林が世界自然遺産に登録されている。北海道では渡島半島がその分布域で黒松内低地帯はその北限になる。

黒松内低地帯の最大のブナ群落である歌オブナ林は1928（昭和3）年に天然記念物指定を受けた。太平洋戦争末期と戦後の一時期に伐採の危機にさらされたが、幸いにまぬがれて保存された。天然記念物に指定されているのはJR函館本線黒松内駅の南東約4kmに位置する面積92・43haの林だが、この他に白井川保護林、ツバメの沢保護林、添別町有林などがあり、さらに近隣の狩場山、大平山などにもブナ林がみられる。

歌オブナ林は、ブナの分布北限の特徴としてブナの優占度が低く（全体の6割程度）、シナノキ、ミズナラ、イタヤカエデ、シラカンバ、ハリギリ、キハダ、ヤチダモ、ウダイカンバなどが混交する。この林のブナの最大胸高直径は136cmで、推定樹齢250年に達する。

林の下にはハイイヌガヤ、エゾユズリハ、コマユミ、ハナヒリノキ、ホツツジ、オオカメノキ、ミヤマガマズミ、ナツハゼ、オオバスノキ、ツルシキミ、クマイザサなどがみられる。ジウモモンジシダ、シラネワラビ、クジャクシダ、クサソテ

ツ、メシダ、シシガシラなどの羊歯類も多い。添別町有林ではギンリョウソウがことに目に付く。

なぜ、ブナがこのあたりを北限としているかについてはいろいろな議論がある。温潤な気候下にある日本において、植物の生育を左右する第一条件は温度だが、成長期間の温度条件を示す温度指数（月平均気温のうち、植物の生長に有効な5度以上の数値を合算したもの）からはブナの生育はもっと北のほうでも可能だ。では、なぜ黒松内低地帯を越えないか？

## 日本で唯一のビジターセンター

アメリカ大陸にはアメリカカブナとメキシコブナが、ヨーロッパと英国南部にはヨーロッパブナが、また、中国にはチェンブナ、エングラーブナ、テリハブナおよびナガエブナが分布する。台湾にはタイワンブナが、そして日本にはブナとイヌブナおよびタケシマブナがある。

幕末の探検家・松浦武四郎は、その克明な記録で有名な『東蝦夷日誌』で、長万部から黒松内への経路を「右にスツツベツ（寿都別）、左黒松内川を眺め々下りて風栗（ピラ二）の木臺、是ぶな多きが故に名づく。後ろ、



山火事原因説あり、結実期に日本海側から低地帯を太平洋側に吹き抜ける冷たい風によるという説あり、羊蹄火山群阻害説あり、降水量制約説あり、気候特性反映食性配置説ありと諸説が出された。氷河期にいったん、南に追いやられたのがいま、少しずつ北に分布域を広げている途中だともみられる。そしてもっと北に分布するミズナラ林とここで競合しつつすみ分けている（ニッチ境界説・渡辺、1985）というのがいまのところ、もっともうなずける見方らしい。

ブナという木は、日本ではあまり重要視されなかった。別の良材が多かったからである。ヨーロッパは家具材などに用いられて優れたデザインのものが高く評価されているが、日本ではお椀などの雑器類にしか使われなかった。最近まで材はほとんど輸出されてきた。並木や庭園に使われることもほとんどなかったが、2005（平成17）年には函館駅前の植え込みにブナが登場する。黒松内町でも市街地や国道並木にブナを採用している。

近年はその新緑や黄葉や灰白色の木肌の美しさが見直されるようになり、黒松内にはブナ林を築

しむ人たちが四季を通して訪れるようになった。ブナの落葉は繊維が硬いのでなかなか分解しにくく、林内を歩くと地面が、弾力があってまるでクッションの上にいるような感じがする。この堆積した落葉の層が高い保水力を持ち、「ブナの森は緑のダム」といわれ、評価が高まっている。ブナの実（種子）は三角錐型をしているので蕎麦の実に見立ててソバグリ（蕎麦栗）の名もある。これはクマも好物だそうで、結実の多い年にはかなり食べるという。ブナは漢字では「山毛櫨」と書くほか、「掬」あるいは「櫛」とも書く。



ウタサイ（丸山）と云う山あり」（カッコ内筆者）と記している。風栗（ヒラニ）はブナのことだとしているがアイヌ名がそうなのかどうか確かではない。パチエラーの辞書には *Beech=Auisam* となっている。

黒松内町には黒松内町ブナセンターがあって、ブナとブナ林についての資料を備え、学芸員が情報サービスを行っている。ブナに絞ったビジターセンターとしては日本で唯一のものだ。年間を通していろいろな野外・屋内講座や展示などの企画が立てられている。近くには歌才自然の家という研修室を備えた宿泊施設もある。



●お問い合わせ先  
黒松内町企画調整課 Tel. 0136-72-3311  
黒松内ブナセンター Tel. 0136-72-4411

# 世界に誇る パウダー・スノー という「商品」

冬、厳しい寒さや雪に閉ざされる北海道人にとって最大の娯楽はスキーだった。小学校の校庭や公園には小さい山があり、子どもたちは毎日そこでスキーを滑る。ゲレンデの整備が進んでいない頃から、スキー愛好者はシールと呼ばれるアザラシの皮をスキー板の裏側に張り、山を登り、新雪を豪快に滑り降りたという。

北海道とスキーの関わりは古く、その始まりは定かではないが、オーストリアの軍人テオドール・フォン・レルヒ少佐が新潟でスキー術を伝えた(日本のスキー発祥と言われている)翌年の1912(明治45)年、次の赴任地となった旭川第七師団でスキーの講習を行って以来、本格的に広まったとされる。翌1913(大正2)年、ニセコ地域においても、レルヒ中佐(北海道への赴任途中で昇格)から手ほどきを受けた人たちによって住民たちにスキー技術が伝えられた。ニセコヒラフスキー場入口のレルヒ記念公園で一本杖を持ちスキーを履いたレルヒ中佐の像が私たちを迎える。

大正時代からは、北大スキー部や小樽高商(現小樽商大)スキー部が相次いでニセコ地域で毎年合宿を行うようになった。今も当時の練習場が「北大スロープ」「高商スロープ」の名で残っている。これらの人々により、地域の住民の間にスキー熱が高まっていった。

北海道の各地にスキー場が整備され、多くのス

キーヤーが訪れる。その一つ、ニセコ連峰は蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山の西側にあり、主峰の標高1308・2mのアンヌプリを中心にイワオヌプリ、チセヌプリなどの山々が連なり、ヒラフ、東山などの数多くの大規模なゲレンデが切り開かれている。

スキーのメッカ「ニセコ」の名を広める契機となったのが、昭和初期スイスのサンモリッツで開催された第2回冬期オリンピックで、この大会に日本は初参加した。ちょうどその時期、「スキーの宮様」として親しまれた秩父宮様が視察とスキー練習を兼ねてこのニセコ地域を訪問、当時の新聞には「極東のサンモリッツ」の語が紙面にのり、後に「東洋のサンモリッツ」としてニセコ地域の名が国内外に広まっていくこととなった。

1964(昭和39)年には倶知安町とサンモリッツ市は姉妹都市の提携を結び、2004(平成16)年には姉妹都市提携40周年を迎えた。両地域はスキーインストラクターの受け入れや、音楽や食文化など、幅広い交流を行っている。

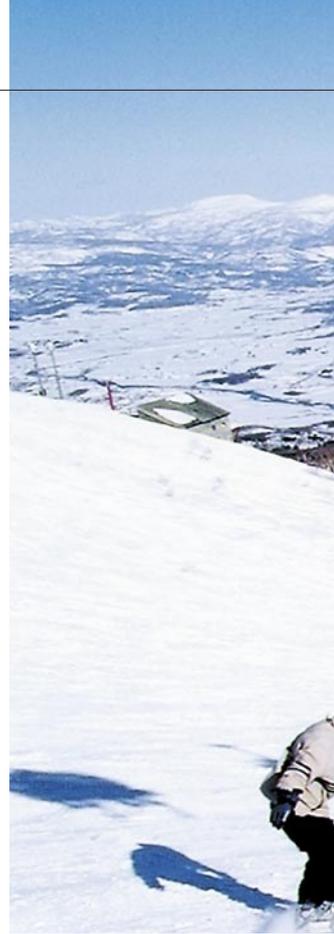
ニセコ地域のスキー場の最大の特徴はその素晴らしい雪質である。北海道の中でも豪雪地帯として知られ、日本海からの北西の季節風がニセコ周辺の山々に吹きつけ、多い年には2mを超える積雪となる。そのうえ、寒気は非常に強く、これがとくに乾いてさらさらとした(しばしば「砂糖の



ニセコ地域は今、四季を通したアウトドアレジャーの拠点としても注目されている。



夕闇に浮かぶスキー場は幻想的



## ニセコ山中の「歴史の生き証人」

1941（昭和16）年から、ニセコ連峰の厳寒の気象を利用して、軍用機の墜落事故の原因の一つとなっていた機体への着氷実験が行われた。「雪は天から送られた手紙である」の言葉で知られる、中谷宇吉郎北海道大学教授が、旧日本軍の依頼を受け、ニセコアンヌプリ山頂に着氷観察所と本物の零戦を設置し、過酷な状況下での研究が進められた。戦争終結によって研

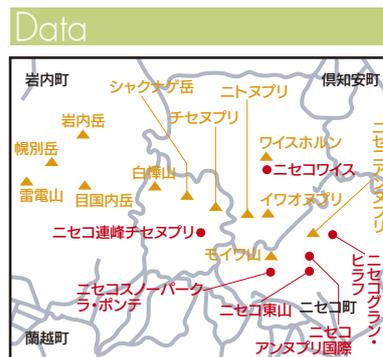
究は終わり、建物も封鎖されたが、その機体がアンヌプリ山中で発見され、1990（平成2）年に右翼が倶知安町風土館によって回収された。現在、展示の準備が進められている。60年間、いつの時代もスキーを楽しむ人々の笑い声を聞き、冬山の数々の厳しさを見てきた生き証人がいま甦える。

ような」と形容される）雪質を生み出す要因である。これだけの雪質を誇る地域は世界でも稀で、全国のスキー愛好者の人気を呼んでいる。晴天の日に、ゲレンデから見る真向かいの蝦夷富士（羊蹄山）の姿は格別だ。

近年、娯楽の多様化によりスキー人口の減少が懸念されているが、ニセコ地域は今、新たに最高のパウダースノーを求めて訪れるオーストラリアからの観光客で賑わい始めた。

ニセコ連峰の自然は雄大で、四季を通じて自然を楽しめる。美しい湖沼群やお花畑を見ながらの登山や、数多くある温泉、最近では尻別川を中心にラフティングやカヌー体験もできるなど、アウ

トドリゾートとして、ますます人気が高まりつつある。周辺の広大なじゃがいも畑も北海道ならではの光景だ。



●お問い合わせ先  
倶知安町企画振興課 Tel. 0136-22-1121

# 積丹ブルーとニシンの記憶

積丹半島は、切り立った断崖と奇岩怪石が連なる海岸美、有島武郎の小説『生まれ出ずる悩み』の主人公、木田金次郎が愛した絵のような「積丹ブルー」と呼ばれる青色の海と白波、かつてのニシン漁千石場所の記憶、そしてさまざまな悲話伝説が織りなす北海道の歴史・自然史物語の宝庫である。

また、積丹半島は、1856（安政3）年発見の道内最古の炭鉱・茅沼炭鉱、1906（明治39）年の北海道初の岩内水力発電所、1989（平成元）年に運転が開始された北海道電力泊原子力発電所といった三つのエネルギー産業史上の「北海道初」を持つ場所でもある。

この半島は5万年前の溶岩台地であり、鉱物が豊富で、金銀重晶石（稲倉石鉱山）、亜鉛（余市鉱山）、マンガン（大江鉱山）の大鉱山があった。海岸は、この風化しやすい岩石が一年中強い北西の季節風波浪を受けて強く浸食され、切り立った海食崖の男性的な景観の断崖を形成し、浸食が免れた部分も波打ち際に奇岩怪石を生んだ。もともと溶岩台地で火道跡だった岩石はローソク岩、弊子岩などの名所岩となり、その美しさは洋上観光でも楽しめる。

海岸美の反面、半島の交通は難所が多く、明治期の漁業時代は北前船や磯船の巡航だけ、大正期には海岸線のみ道路開削で狭い危険なトンネル

## 漁業遺産「袋澗」

積丹半島東海岸の崖辺海中には、城壁のような珍しい石積みみの遺物が多数見られる。半島一周で114基もある。観光客には理解できない謎の構造物だが、これが積丹半島のニシン史で忘れられない漁業土木遺産である「袋澗（ふくろま）」の遺構である。ニシン場の網元が大金を投入し、本州からの護岸工事専門の石屋を呼んで造らせた。小さいもので磯船4、5隻のみの係留ものから、大きいものでは今の大型漁港に匹敵する縦横100m近いものまであった。

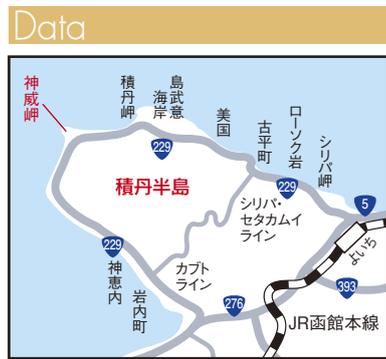
積丹半島では、3〜4月の漁期に季節風波浪が凄まじい上、崖海岸のため、沖で大漁したニシンを水揚げすることができなかった。このため、明治の網元は知恵を働かせて、ニシンを桙船（200石）から、20石程度ずつ直径3m、長さ15mくらいの小袋（袋網）に分け移して、天馬船でそれを岸に造った石積みみの堅牢な生け簀の袋澗（船溜り兼用）に水路で引き込み、ゆっくり水揚げした。この装置で積丹のニシン漁獲高は急上昇し、全道一の漁場に発展した。最盛期の明治後期には100m間隔で造られるほどで、「袋澗銀座」が現出したという。1933（昭和8）年に積丹のニシンは消え、バブルの見本のような



が半島を巡って連なり、泊、兜海岸の崖の中腹には地元網元が苦勞を乗り越え開削した旧道も残る。1996(平成8)年2月に発生した余市町豊浜トンネル崖崩事故ではバスの乗客らが犠牲となり、改めて半島開発の困難さが浮き彫りにされた。同年11月、半島開発上念願の半島一周道路(国道229号)が長大トンネル貫通で開通し、大幅な観光客の入り込みと産業開発が期待されたが、2004(平成16)年9月に発生した台風18号により、強風と高潮で高架橋が流され、再び不通となった。この半島の生活は自然の美の恩恵の反面、厳しさとの戦いの歴史であったといえる。

積丹半島はニシン産業と文化でも名高い。表積丹と呼ばれる西海岸(余市、美国側)は小樽市へつながり、ニシン漁の機械化や、海上の船同士でニシンを買う「つふ買い」などにより、多くのニシン大尽と文化が育った。余市のシリバ岬周辺の海岸には、当時のニシン番屋が多数残っており、美国漁港裏手の旧漁港には、ニシン大番屋とソーラン節発祥の地碑がある。

一方、岩内漁港から茅沼、泊、兜、盃、神恵内、



●お問い合わせ先  
 積丹町商工観光課 Tel. 0135-44-2111  
 積丹観光協会 Tel. 0135-44-3715

赤石、川白、沼前にかけての東海岸(裏積丹)は、一周道路の未開通で産業の発達が遅れたが、そのおかげで自然が保存され、奇岩と崖海岸、積丹ブルーと白波の絶景地で、その神秘性が人気を集めている。現在、ここには多数の近代的な渡り橋が建設中で、開発が保全かの対立現象が一周道路開通後の積丹半島にも遅まきながら出てきている。

この東積丹観光での最大のポイントは神威岬である。ここは海岸美の極致といえる離岸独立巨岩からなる沈降海岸で、その雄々しい美しさに加え、種々のアイヌ伝説に彩られている。また、神威岬は、江差、松前地方のニシン隆盛時(明治時代)に歌われた『江差追分』にある「忍路(おしよろ)、高島およびもないが、せめて歌棄、磯谷まで」の境目でもあり、女人禁制の余市場所小樽市側までの追いニシン漁で、その手前の磯谷場所別れの悲哀を歌った歌詞として古くから名高い。

高価な袋澗は銀行の抵当になるなど急速に廃れ、崩壊し、北海道庁により一部は漁港に改修された。現存しているものは、土木遺産としての学会評価も高く、今後、ニシン村整備など地域おこしの適材として、間知石練り積みなどの堤体補修、ウンボなどで浚渫、プールやウニ養殖、アザラシの遊び場などの活用が望まれている。



木下の袋澗(神恵内村)

# 理想郷づくりから70年、 余市のまちにモルトが薫る



余市蒸溜所は1934（昭和9）年、ニッカウヰスキー創業者である竹鶴政孝によりニッカウヰスキー第一の蒸溜所として建設された。

余市町は札幌から西に約50km、積丹半島の付け根に位置し、澄んだ空気と夏でもあまり気温が上がらない気候に加え、近くに良質のピートに恵まれている土地。

「ウイスキーは北の風土が育むもの」という信念を持つ竹鶴にとって、ここ「余市」は自分の理想とするウイスキーづくりの条件をすべて満たした理想郷であったといえる。そしてこの地との出会いから2年、1936（昭和11）年に竹鶴政孝の長年にわたる意思と悲願を託したポットスチルに火がくべられ、モルトウイスキーの製造が開始された。以来、今も変わらぬ製法でウイスキーの蒸溜、貯蔵を行っている。この豊かな自然の恵みと、厳しい北の気候風土に囲まれた余市はニッカウヰスキーの発祥の地であり、同社のモルト品質の原点となっている。

竹鶴は1894（明治27）年、広島県竹原町（現竹原市）の造り酒屋の三男として生まれ、家業を継ぐべく、大阪高等工業（現・大阪大学）醸造科へ進むが、学校で洋酒の世界に興味をもち、卒業後大手洋酒メーカーの摂津酒造に入社、2年後の1918（大正7）年7月、単身スコットランドに渡り、グラスゴー大学の応用化学科に聴講生と

して入学、ここで豊富なウイスキー関係の文献とウイリアム博士に出会った。

竹鶴はウイリアム博士の紹介を受け、ウイスキーづくりの本場ローゼスという町の収税官吏の家に下宿した。ハイランドと呼ばれるこの地方は多くの蒸溜所が点在し、竹鶴はあちらこちらを訪れては製造方法を学んでいった。とくにロングモーンの工場では、麦の乾燥から蒸溜器の掃除までを体験。また、蒸溜器を叩いて、その反響で蒸溜の進み具合を知るといったコツも体得した。

竹鶴は見たこと、習ったことをすべてその日のうちに克明にノートに記録、このノートは後に「実習報告」として残され、日本における本格ウイスキーづくりのため大いに役立つこととなった。

さらに、スコットランドの留学時に生涯のパートナーとなるジェシー・ロベルタ・カウン（愛称リタ）と出会い、結婚。1921（大正10）年11月、3年ぶりに愛妻とともに帰国するが、当時は本格ウイスキーづくりの計画も実現できず、摂津酒造を退社。1923（大正12）年6月に寿屋（現在のサントリー）に入社し、本格ウイスキーの製造にとりかかり、1929（昭和4）年4月1日、日本人として初めてつくったウイスキーが世に出ることとなる。1934（昭和9）年3月、10年の契約期間を終え、寿屋を退社。

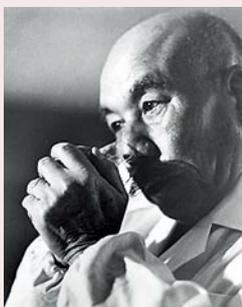
そして、ウイスキーは自然・気候風土が育むもの



今も創業当時と同じ製法でウイスキーが作られている。余市蒸溜所はすべて当時の社員たちの手で建てられ、木が植えられた。主に軟石で造られた建物群はスコットランドをほうふつさせる。

の心に決め、北海道の余市に同年7月「大日本果汁株式会社」を設立した。10月に念願のウイスキーづくりを開始、モルト原酒の熟成を待つ間にリンゴジュースの製造を手がけるなどして貯蔵庫に眠るモルト原酒の熟成をひたすら待ち続け、1940（昭和15）年10月、念願の第1号ウイスキーを出荷、その名を大日本果汁の「日」と「果」

## 「日本の一青年が 英国の秘密を 盗み出した」



竹鶴 政孝

竹鶴政孝が本場スコットランドの味を日本に導入した情熱を語るエピソードがある。1962（昭和37）年に来日した英国のヒューム首相は、ニッカウヰスキーの味の良さに感銘して、歓迎パーティーの挨拶で「日本の一青年が1918年、1本の万年筆とノートでギリス伝統のウイスキーづくりの秘密を盗んでいった」と語った。余市町こそ、情熱の男・竹鶴政孝が全国を行脚して最後に辿り着いたウイスキーづくりの理想郷であった。竹鶴は1979（昭和54）年に85歳で没するまで、「ウイスキーを左右するのは優れた自然と人の心構えだ」と述べ、生涯、ウイスキーづくりを貫いた。

からニッカウヰスキーと命名。以後70年の歳月を費やし、製造方法は当時と同じく直火蒸溜にて、香り高い重厚なモルト原酒を製造している。

余市蒸溜所では、尖がり屋根の石造りの工場群（工場正門、第一麦芽乾燥塔、第二麦芽乾燥塔、蒸溜工場、仕込み工場、醗酵タンク室、混和工場、製樽工場、貯蔵庫27棟）や創立当時の事務所（余市町指定文化財）、リタハウス（旧研究室）などが点在し、異国情緒あふれる雰囲気醸し出している。また、ウイスキー製造工程と1998（平成10）年に貯蔵庫を2棟改造して造られたウイスキー博物館の見学ができ、博物館の中ではシングルカスクウイスキー（原酒）10年の試飲、ウイスキー会館ではウイスキー・リンゴジュース・アップルワインの試飲が楽しめるなど、年間通じて大勢の見学者で賑わっている。



●お問い合わせ先

ニッカウヰスキー余市蒸溜所

Tel. 0135-23-3131

余市町総務部企画政策課

Tel. 0135-21-2142

# 北海道を代表 する工場群と 職人のまち



サッポロビール博物館



福山醸造

札幌は昔から役人と商人のまちで、大工場がないのが特徴だった。北海道の開拓を本格的に進めた開拓使はアメリカから招聘したホールレス・ケプロンの指導のもと、ニューイングランドの工業団地方式を導入し、1872（明治5）年、札幌の中心部からやや東方面の4ブロック（現在の北1条東1〜4丁目）に、北海道初の工業団地「札幌器械所」を設置した。輸入した蒸気機関やタービン水車を動力にした製材工場、製鉄所、鋳造所、製粉所、刃物工場など30棟以上の製造工場を集積させ、この地区を開拓に必要なインフラ整備の拠点とした。

工業団地は昭和30年代の都市化に伴い、郊外への移転やデパートの配送センター化が進められ、その中心的機能を果たした「札幌市工業局」は開拓の村に移築保存されており、現在、この辺りは、歯車工場、製缶工場などが密集する東京蒲田に近い雰囲気をもつ地域となっている。

苗穂地区は、この「札幌器械所」があつた地域に隣接している。国鉄苗穂駅周辺は、豊平川の豊かな伏流水や貨物輸送の利便性から、国鉄車両工場、札幌ビール（元ビート工場）、雪印乳業、福山醸造、フルヤ製菓などの工場が集積し、その職員やOBが住む「産業のまち」として栄えた。現存でも大小様々な工場や倉庫が建ち並んで下町の雰囲気をつくり、北海道に根ざした代表的な企業

が製造を続け、また、記念館・博物館を整備し、北海道の産業の歴史を伝えている。

## 【福山醸造株式会社】

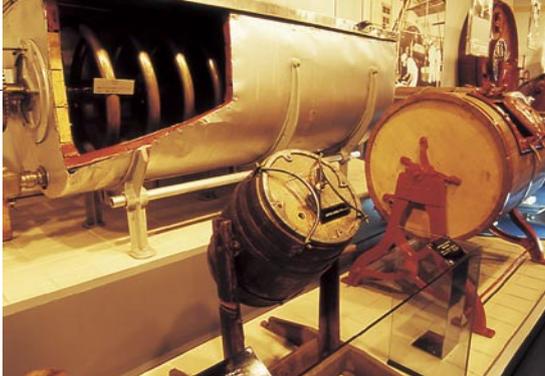
前身の福山商店は、1891（明治24）年に創業。1918（大正7）年に札幌駅前から苗穂地区に移転し、1951（昭和26）年にトモエ醤油、1955（昭和30）年に福山醸造に社名を変更した。現在でもここで醤油を製造しており、全道のシェアを誇る。11棟のレンガ積みみの濾過、醗酵工場は87年の歴史をもつ建築遺産としても価値が高い。現役工場であり内部の見学はできないが、古いれんが造りに創業110年を超える軌跡が刻まれているようだ。

## 【サッポロビール博物館】

1987（昭和62）年に開館した日本で唯一のビール博物館。建物は、1890（明治23）年に札幌製糖会社の工場として建設され、その後札幌麦酒会社の製麦工場として使われた明治の面影を残す赤れんが造りの貴重な遺産だ。1876（明治9）年開拓使麦酒醸造所の誕生からのサッポロビールの歴史を中心とした日本のビール産業史を豊富な資料・映像や明治以来のポスターなどで説明し、実物資料の中では札幌工場で2003（平成15）年まで使用していた直径6・1m、500ml缶で17万本にあたるビール仕込み用の煮沸釜は圧巻である。



北海道鉄道技術館



雪印乳業史料館

博物館は2004(平成16)年12月にリニューアルオープンし、原料の麦芽やホップを手にとって香りをかいだり味わかるコーナーも新しくなった。また試飲コーナー(有料)では、ビールに関しての知識や情報などに耳を傾けながらビールを味わえる。

【雪印乳業史料館】

明治初期にクラーク博士らによって導入された大農法が一旦後退し、農業と酪農の混合農法になった大正時代、酪農の代表企業として雪印乳業はバター造りからスタートした。敷地内にある「雪印乳業史料館」は、1977(昭和52)年、雪印乳業の創業50周年を記念して設立されて以来350万人が入館している。館内には、バターやチーズなどの乳製品の製造過程や歴史を教える資料が展示されており、特にバターチャーレンと呼ばれる創業当時のバターづくりの機械や、粉乳用の濃縮機・乾燥機などの実物、昔のパンフレット、工場全体を1/10のサ

イズにした模型などが系統的に並べられ、長い歴史の中での改良の歩みが一目でわかる。隣のミルク工場の見学もでき、見学者への史料館自慢のアイスクリームのサービスも魅力的だ。

【北海道鉄道技術館】

明治政府の殖産興業政策に呼応して、北海道では小樽市手宮の鉄道工場(明治13年)をはじめ明治末期までに複数の鉄道車両工場が作られた。現在の苗穂工場は、1909(明治42)年に鉄道院北海道鉄道管理局札幌工場として設立されたもので、その規模は当時の日本製鋼所室蘭製作所に並び道内最大で、約50万㎡の広大な敷地に20棟のれんが建築等の重厚な大型建物が林立していた。現在の苗穂工場の敷地面積は約20万㎡と半減しているが、約1000台の工作機械が稼働している。「北海道鉄道技術館」は当時、倉庫として使っていた赤れんが造りの建物を利用して、1987(昭和62)年に開館した。北海道の国鉄の歴史や札幌工場の様子を語る実物資料が展示公開されて

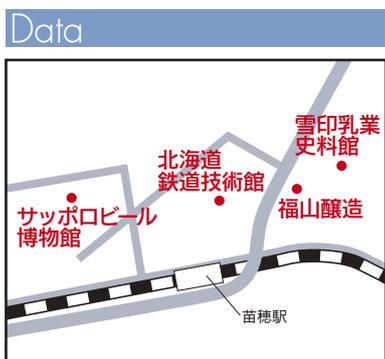
いる。また、館内にはリゾート列車として人気を博した「アルファコンチネンタルエクスプレス」が展示されているほか、苗穂工場内には「C62」などの歴史的車両が静態保存されている。毎年10月の鉄道旬間には技術館に加え工場内部も一般公開され、多数の市民や鉄道ファンに親しまれている。

産業遺産とまちづくり

苗穂地区の近隣住民で作る苗穂駅周辺まちづくり協議会では、まちの工場・記念館群が北海道遺産に選定されたことを契機に、地域と企業が一体となって、北海道産業史を知る上で重要なこの地域をよく知ってもらうと意欲的だ。

協議会内のニュース部会では、まちの壁新聞ともいえるべき「はばたく苗穂」で選定を伝え、今後はツアーなども企画する方向で検討している。

もともとこの協議会は「なえぼ」の歴史や見所、イベントなどを一覧にした「散策マップ」を作成するなど、札幌のまちづくり団体の中でも高い行動力を持っていると評判で、これからの活動が注目されている。



- お問い合わせ先
- サッポロビール博物館 Tel. 011-731-4368  
開館：5月～9月 9:00～17:30  
(入館17:00 まで) / 11月～4月  
9:00～16:30 (入館16:00まで)
- 休館：12月29日～1月5日  
入館料：無料 (試飲は有料)
- 雪印乳業史料館 Tel. 011-704-2329  
開館：9:00～15:30  
休館：土・日・祝日 (7、8月は無休)  
入館料：無料  
※前日までの予約が必要
- 北海道鉄道技術館 Tel. 011-721-6624  
開館：毎月第2、第4土曜日  
13:30-16:00  
入館料：無料



時計台



豊平館



清華亭

# 道都の120年を見続けて

開拓使は1869（明治2）年、明治政府（太政官）直属の機関として設けられ、1882（明治15）年まで北海道、樺太の開拓事業にあたった。札幌には開拓使の手になる建築が10棟近く遺されている。西欧文明の移植による近代国家建設をめざしたこの時代の歴史を今に伝える建築群である。

時計台は1878（明治11）年札幌農学校の演武場として建てられた。札幌農学校はW・S・クラーク博士を教頭にむかえて、1876（明治9）年に開校した。開校当初は小規模な学校で、キャンパスの位置が今の時計台を含む一角であった。開校時には北側に外人教師館を改装した講堂と南

側に寄宿舎があるだけで、二棟の間が大きく空いていた。中央講堂を建てる予定で、あれこれ計画が練られたのだが、結局下階は博物館展示室など、二階に大きなホールをもつ演武場が実現した。演武（ドリル）というのは、クラーク博士の故国、アメリカ合衆国の州立大学で当時行われていた軍事訓練プログラムのことで、体育実技と大講堂を兼用するホールであった。まだ市民会館などなかった時代のこと、この演武場は一般市民の講演会や音楽会などに広く開放されていた。

1903（明治36）年、農学校が現在の北大キャンパス地に移転したとき、演武場が取り壊しをまぬがれたのは市民に深く根付いていたことも一因である。

時計塔は最初からつけられていたが、建物完成の1年後、ボストンのハワード社から取りよせた自鳴鐘付き大時計が、いざ到着してみると塔が小さすぎて建て直したというエピソードが記録されている。以来120年以上にわたって時を告げ、時鐘の音を響かせ続けたのは奇跡に近く、その陰には営々と時計の保守管理に尽くしてきた井上時計店主親子二代の奉仕が秘められていることを忘れてはならない。

豊平館は、時計台に比べて一般的な観光人気では及ばないが、普段着とは違う、少し晴れがましい建物として親しまれてきた。建築的な評価でも高い点がつけられている。

開拓使官舎のホテルとして1880（明治13）年に建築完成、造園などの仕上げが続いて翌年オープンした。実際は明治天皇の東北北海道巡幸での行在所にあてる目的が重なって、開拓使の総力を注ぎこんで建てられ、14年にわたる事業を代表する記念建築となった。ホテルとしても日本のホテル史上最初期のものに数えられる。

コリント・オーダーの円柱を立てた華やかな半円形ポーチには、貴顕の馬車が乗りつけ、二階のバンケットイング・ルームは舞踏会でも開く構想が伺える。一階には食堂やビリヤード・ルームがあり、客室は居間と寝室セットのスイートが10組

## Data

時計台（国指定重要文化財）

開館：9:00～17:00

休館：月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始

入館料：大人200円、中学生以下無料

豊平館（国指定重要文化財）

開館：9:00～17:00

休館：年末年始

入館料：無料

清華亭（札幌市指定有形文化財）

開館：9:00～16:00

休館：年末年始

入館料：無料

旧永山武四郎邸（道指定有形文化財）

開館：9:00～16:00

休館：年末年始

入館料：無料



●お問い合わせ先

札幌市観光文化局文化財課

Tel. 011-211-2312

設けられていた。北の鹿鳴館といったところだ。1957（昭和32）年に中島公園へ移されるまでは大通1丁目、今の市民会館の場所にあった。1927（昭和2）年、背中合わせに公会堂が建てられてからも、迎賓館として使われ続けた。その伝統を継いで移築後は市民の結婚式場として使われ、2004（平成16）年までに2万組ものカップルがここから誕生している。

清華亭は北大クラーク記念会館の南隣り、敷地が北8条通りから一段低く、木立に隠されてひっそりと建っている。1880（明治13）年、小庭園を整え「貴賓の接待所」として建てられた。つくりとしては住宅建築で、和洋ふたつの客間を併設している。ここは北大キャンパスを流れるサクシユクトニ川の湧水地で、開拓使は鮭鱒孵化などの試験場としていた。

清華亭と同様のは旧永山武四郎邸（北2条東6丁目）にもあって、ほぼ同時期の建築と推定されている。和洋室併設住宅のさきがけとして

も注目されている。北海道大学付属植物園の博物館は、1882（明治15）年に建てられた。開拓使事業の最後を飾る洋風建築である。なにか新機軸を求めてであろうが、その建築設計をわざわざボストンの建築家ペートマンに依頼している。木造下見板の外壁は共通だが、建物全体に細かな装飾がちりばめられて他の開拓使建築とひと味違った建築になっている。

1877（明治10）年に建てられた工業局庁舎が北海道開拓の村に移築保存されている。もとは大通東の札幌工場構内において、開拓使の工業開発を推進した本部であり、時計台や豊平館を設計した建築スタッフもここで働いていたはずである。

そのほか、札幌農学校の附属農場に建てられた家畜房や穀物庫も開拓使の建築。また、簾舞の通行屋「旧黒岩家住宅」（1872年）や「琴似屯田兵屋」（1874年）も開拓使によって建てられた建築である。和風ではあるが、小屋組には洋風トラスがかけられているという特徴が注目される。

## シャンデリアに見る職人芸

豊平館の各室天井を飾るのがシャンデリア。その吊元に円形の漆喰レリーフが華をそえている。鳳凰にガラスの目玉を入れたり、朱彩をほどこしたりと見事な職人芸だ。

幕末明治初期の関東一円で盛んにつくられた装飾漆喰で「鏝絵」と呼ばれる。その統帥が伊豆の長八親方で、伊豆松崎町には長八美術館があり長八やその弟子たちの仕事ぶりを見ることが出来る。豊平館の外壁には群青色のペンキが塗られていた。その顔料（ウルトラマリンブルー）はとても高価な輸入品だったが、幕末のウルトラマリンブルーとしては、金沢成巽閣座敷の壁がよく知られている。



# 名建築物を支えた 焼き物のまち

開拓使は、大規模工場と倉庫の建設用として、また寒冷地の建物として、企業にれんが建築を奨励した。これにより明治から大正10年代にかけて、れんが建築が道内に普及した。これは本州も同様であり、明治政府の技術工廠（特に三井、三菱系）により、産業革命期のイギリスれんが建築技術が導入されたことが大きく関与した。

明治初期から全国的にれんが工場やれんが建造物の建設が進められ、北海道では函館、旭川、空知、網走、十勝、名寄、小樽、岩内、根室、札幌、江別で工場が興った。この時期はよい粘土を産する地方と集治監に工場が置かれるという特徴があり、この頃の原始的れんが焼きが典型的労働集約型産業として、廉価な労働力を求めたといえる。

明治期のれんが工場は小規模で、陶器焼き転用の「登窯」が中心であったが、そのれんがで開拓使倉庫やニシン場倉庫、大規模なものとして北海道庁舎、札幌ビール第1、2工場、帝国製麻札幌工場、五番館、北海道鉄道旭川工場、小樽手宮機関庫、函館郵便局庁舎などの名れんが建築が生まれた。これらは、帝国製麻、五番館を除き現存しており、れんが建築の優秀さが分かる。登窯には北炭の両登窯など、大規模・大量生産が可能なものもあった。

こうした大型の庁舎や工場施設、倉庫はすべて、明治初中期では壁を極端に厚く積み上げる方法で

建てられ、明治後期では木骨（木芯）にれんがを張りつけることにより重量を軽減し、壁材の強度で大型建物の全体を支えた。

1888（明治21）年建造の札幌ビール第1工場（現在のサッポロファクトリー）や1901（明治34）年の第2工場（現在のサッポロビール園）、1907（明治40）年建造の北海道庁は、れんが壁の厚さが70cmにも及んでおり、この大きさの建物をれんがだけで支える大変さが理解できる。当時の北海道庁舎を建造するだけでも250万個のれんが素材をあらかじめ用意しなければならず、また、イギリス積み、フランス積み、オランダ積み、ドイツ積みといわれるような意匠的に複雑な技法をれんが積みの職人が競ったことから、れんが建築は歴史的で芸術作品としての価値が高いが、多数の大型建物を短期間で建設することには向かず、技術的な過渡期であった。

大正期以降、道内のれんが製造の中心は全道一の粘土、陶土産地帯である野幌周辺に移り、製造方式も連続式多量生産の最新式「ホフマン輪環窯」となった。野幌には9工場、白石（道庁赤れんがの供給で有名）、月寒に6工場の計15工場が発達し、道内最大のれんが製造地帯を形成した。北炭もここに専用工場を持ち、れんが造りの独特な炭鉱建築を多数建造した。これらの工場は商店、民家用の建材用れんがのほか、土管、煙突も生産し、



北海道開拓の土木インフラ建設を素材面で支えた。だが、戦争軍事で急速に発達し、戦後復興で加速した薄く丈夫な鉄筋コンクリート建設の発達に押されて、れんが建築は徐々に減り、1975（昭和50）年以降急減した。

江別市野幌には現在、最盛期の15工場のうち、北海煉瓦合資、米澤煉瓦、昭和窯業の3工場のみが残り、1960（昭和35）年以降主流となった

旧れんが工場の一部を使った「グレシャムアンテナショップ」。江別市と米国オレゴン州「グレシャム市」が姉妹都市交流の一環として行っている経済交流を活発にするためにオープンした。古いれんが建造物の活用についてのシンボリックな存在で、店内にはグレシャム市のFM放送局KMHDの音楽がライブで流れ、グレシャム市のポイドコーヒーも楽しめる。

（住所：江別市東野幌町3番地の3／電話：011-385-6056）

「トンネルキルン」で丈夫な還元性れんがを製造、道内に新しいれんが文化を構築している。

産業遺産としては、大正時代に建設された北海煉瓦合資の工場が1996（平成8）年冬に倒壊消失、1945（昭和20）年建設の昭和窯業のホフマン窯煙突も消失し、肥田製陶の煉瓦工場だけが往時の繁栄を伝えている。

## れんがの大きさは時代とともに小さくなった？

明治初期のれんがの寸法は、開拓使が欧米の技術導入のために招聘したお雇い外国人の手に合わせて大きく、以後、大正・昭和と日本人労働者の手に合わせて小型化されたので、明治れんが建築は、記録がなくてもその使用れんがの寸法で年代が特定されるという個性を持つ。

大きさと年代の相関表を作成して、現地調査で活用している名物れんが博士・水野信太郎氏が野幌にいる。彼の尽力で、2004（平成16）年10月に「赤煉瓦ネットワーク」の第14回全国大会が江別市で開催され、NPO、市役所あげて、れんがのまち江別を全国にアピールした。

## れんが遺産とまちづくり

江別産のれんがは現在、全国の25%のシェアを誇り、市内には江別小学校、江別第三小学校などの校舎一部が総れんが作りのうえ、サイロ、民家、倉庫など400棟以上の歴史的れんが建築、塀など約2600件の物件がれんが美を競う。

市のれんが文化中心施設「セラミックアートセンター」には、北海道のれんが史と焼き物文化の展示が充実している。

また、土管製造の全国一を誇った肥田製陶の旧工場がそのまま江別市に寄贈され、アンテナショップとなり、NPO法人「やきもの21」が活動拠点として、れんが建築の保存と活用の運動を展開している。

同法人が毎年7月上旬に開催する「えべつやきもの市」には全道300を超え、窯元などの作品が展示販売され、2日間、全道各地から10万人を集める大イベントに発展している。

## Data



●お問い合わせ先  
江別市商工振興課 Tel. 011-381-1023  
NPO法人やきもの21 Tel. 011-391-2155



# 米どころ空知を貫く もう一つの「川」

北海幹線用水路は、空知平野の水田を潤す長大なもので、空知中央部の赤平市から、砂川市、奈井江町、美唄市、三笠市、岩見沢市、北村、栗沢町、南幌町と北から南へ約80kmに及ぶ。これは日本でもっとも長い農業用水路で、受益面積は約2万6000haに達する。

用水路のルートは赤平の空知川頭首工（水の取り入れ口）から夕張山地の西側の丘陵下部に沿って南下するので、途中いくつかの小河川をまたいだりしなければならぬ。こうした箇所では水路橋が設けられている。ペンケウタシナイ川の上を通るペンケウタシナイ水路橋などはその代表的な例であるが、そのほかにも奈江川、奈井江川、産化美唄川、茶志内川、栗沢の加茂川などに水路橋が設けられている。また、美唄川、幾春別川、幌向川、新夕張川など、逆サイフォンを設けて川の下を抜ける工法が採られたところもある。

丘陵末端とはいえ、山腹には起伏が少なくないからトンネルで通過する箇所もある。かつて空知地方には多くの炭鉱があつて石炭積み出しの鉄道が東西方向に通っていたので、それらの鉄道路線の上下を抜ける必要があつた。

灌漑用水路は農家にとって営農に不可欠なものだが、一般市民はほとんどその存在も意義も知らない。それどころか時には邪魔な存在だと思われるている場合すらある。ことにこの用水路は市街地、

## 短時間で完成した「難工事」

用水の受益面積約2万6000haというのは北海道の水田面積比（1997年）としては約10.8%になる。北海道の水田の約75%は空知、上川、石狩地方にあるから、この中での割合はもっと大きい。

水路計画は1909（明治42）年に立てられたが、第一次世界大戦の戦後不況などで実現に至らなかった。1915（大正4）年に再び計画が浮上、1921（大正10）年調査が行われ、1923（大正12）年11月に着工の予定であったが、関東大震災のあおりでまたまた延期、ようやく1924（大正13）年着工、4年4カ月という短期間で1929（昭和4）年に完成した。

赤平頭首工から6工区に分けられ、1925（大正14）年から着工、その後、各所で揚水機場、分水工、放水工などが整備された。箇所によっては着工後も地主の了解が得られず、土地買収が進まないで難航したというが、最後には解決して予定通り工事は完了した。また、工事中に洪水や出水が起きたところもあった。

支線（支幹線、支派線）水路としては豊沼、茶志内、晩生内および沼貝幹線などがある。これらは北海幹線用水路と平行して着工され、1929（昭和4）年に竣工した。函館本線、室蘭本線の鉄道を横断する工事は当時の鉄道省に委託されて



用水路としての表情を見せる市来知幹線（下／三笠市岡山）とペンケ用水路（左／砂川市焼山）。空知の豊かな穀倉を支え続けている。



空知川（右）の水を頭首工から引き入れ、北海幹線用水路は始まる（北海頭首工／赤平市）



親水の間としての整備も進む（流れのプラザ／砂川市）

住宅地を通ることがあり、橋を渡るのに迂回しなければならぬところもあり、水勢が早いから危険も伴う。そこで市街地では蓋をして上を公園化するとか、親水広場にするなどの工夫も凝らされている。

これからは用水路の機能だけでなく、多様な使い方が求められるだろう。桜堤や紅葉堤にしたり、自然歩道に仕立てるのでもいいかもしれない。最近では市民の関心も高まり、いろいろな見学会も催されるし、住民による用水の整備も行われ、栗沢町ではグリーン少年団が植樹活動に乗り出した。赤平の頭首工付近の住吉町内会では、毎年アジサイを植栽し、住民の手で憩いの場所となる東屋を整備した。



●お問い合わせ先  
北海土地改良区 Tel. 0126-22-2400

行われた。ことに岩見沢駅構内をサイフォンで抜ける工事は規模も大きく難工事だったという。これを含めて鉄道関連の工事は鉄道橋、開渠、暗渠などを含めて幹線5カ所、支幹線9カ所、支線7カ所の合計21カ所にのぼった。

用水路は当初から一部コンクリートで施工されたが、当時はまだ国内産セメントの製造能力は少なく、時に不良品も出たので、函館の浅野セメント会社と直接一括供給契約した。結果として全区を通じて所用セメント量は確実に供給されたが、途中、関東大震災が起きて供給も一時難航したという。

史料には、資材や工事の請負については業者の談合があるから大変だ、それをできるだけ避けるためにきちんとした入札をしなければならぬという意見が出た、などと記されている。

工事を巡っての意見の相違ももちろんないわけではなかった。美唄の逆サイフォン工事では農業者の騒動があり、犠牲者も出たという。水争いという言葉があるが、まさに農業については昔も今も水が大きな問題なのであった（参考：『北海道改良区八十年史』・北海道土地改良区、平成13年）。

何気なく見て、通り過ぎてきた用水路は、地味ではあるが豊かな穀倉地帯を支える重要な役割を果たしてきたのである。

# ユニークな特徴を持つ 山岳型高層湿原

北海道は湿原の宝庫で、さまざまなタイプの湿原があり、低地では釧路、サロベツなどが有名だし、山地としては大雪山の沼の原と沼の平、天塩山地の松山とピアシリ、ニセコ山地の神仙沼などが知られている。

雨竜沼湿原もその一つだが、日本の山地湿原の中でも、もっともユニークな特徴を持つ。すなわち、山地湿原としては尾瀬が原に次いでそのスケールが大きい上、ほぼ真円形の池塘（ちとう／湿原の沼）が多く分布している。しかも、これらの池塘は柵田のように高低差をもって並んでいて景観にも変化が大きい。

この湿原は暑寒別山地のほぼ中央部にあって暑寒別岳、南暑寒別岳、恵岱岳、群馬岳などに囲まれた緩やかな台地上に成立したもので、標高850m、面積はおよそ100ha。ほぼ中央にペンケベタン川が西から東へ蛇行しながら流れ、その両側に多数の池塘が並ぶ。池塘を中心としてミズゴケをベースとした群落が発達していて、ホロムイソウ、ホロムイイチゴ、ヒメシヤクナゲ、ツルコケモモ、モウセンゴケ、ワタスゲなどが多い。池塘にはオゼコウホネ、エゾノヒツジグサなどが浮かぶ。

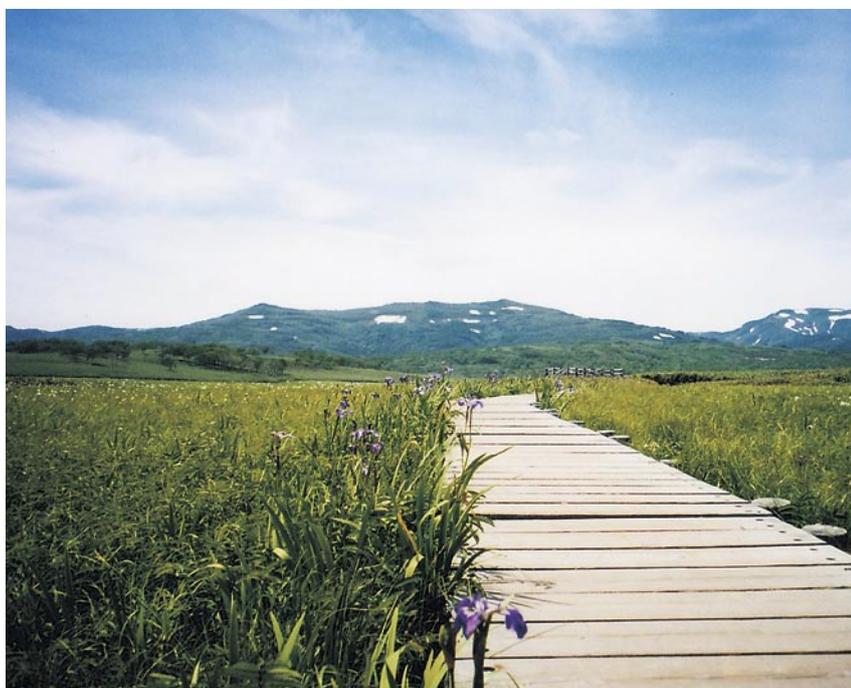
湿原の周辺はチシマザサ群落によって囲まれている。チシマザサは水に強いので湿原の水位が低下すればたちまち侵入を開始する。いまでも各所

でササの展開しつつある状態がみられる。今後、湿原の遷移（植物群落の移り変わり）に大きく影響を与えるだろう。これは北海道西部（日本海側）の湿原の宿命でもある。つまり日本海斜面の多雪地帯にチシマザサが多く分布するので、この地方の湿原は多かれ少なかれササ原に転じる可能性が高いのだ。ニセコの大谷地湿原などはその典型的な例で、すでに大部分がササ原になってしまった。雨竜沼湿原もその美しい姿を少しでも長く保とうとするなら、いまのうちからササの展開を抑える手だてを考えなければなるまい。

雨竜沼湿原では121種の湿原植物が報告されている。これらの植物によって構成される群落は37群落に達するという。北海道だけでなく湿原の種ならびに群落の多様性はきわめて高い。

湿原は四季それぞれに魅力的だが、6月下旬から8月にかけては花がもつとも多くて華やかである。エゾカンゾウ、ヒオウギアヤメ、シナノキンバイソウ、チシマフウロなどさまざまだが、エゾカンゾウ（ゼンテイカ）がもっとも目を惹く。円形の池塘は土壤凍結によって形成された氷塊が後に融けてできたものと考えられる。

雨竜沼という名前は、明治年間に陸軍陸地測量部によって最初に地形測量が行われて5万分の1の地形図が作成された時に名づけられた。その時の測量はろくな道路もなかった頃だから、山地の



## Data



- お問い合わせ先  
 雨竜町産業課 Tel. 0125-77-2213  
 雨竜町観光協会 Tel. 0125-77-2155  
 雨竜沼湿原を愛する会 (事務局: 外山 陽一)  
 Tel. 0125-78-3527

- 登山: 6月下旬から9月  
 登山口の管理棟に登山届け。環境美化整備等協力金500円

かなりの部分は積雪時に測量された。なにしろ有数の多雪地帯であり、雪の下の地形などまったく見えないわけで、土地の人の話から山の上に大きな沼がある、ということから大きな沼を描き込んだらしい。実際、雪解けの季節にはいくつかの沼(池塘)が繋がってかなり大きな沼になるところもある(2004年9月の大雨の後に、湿原のかなりの部分が水没し、多くの池塘がつながって一つの大きな沼に見えたことがあったから、まんだら嘘でもないのだが、それにしても明治期の地図の沼は大きすぎる)。

## 保全への取り組み

雨竜沼湿原へ行くには雨竜町からペンケベタン川沿いに南暑寒荘まで車で入れる。道路が狭くて土曜日曜はかなり混み合うことがある。ここから歩いて雨竜沼までは約4km。約1時間30分。途中に見事な白竜の滝を見て、二つの吊橋を渡る。雨竜沼湿原には延長約3.5kmの木道が整備されていて歩きやすい。湿原を傷めないために木道から決して降りないこと。

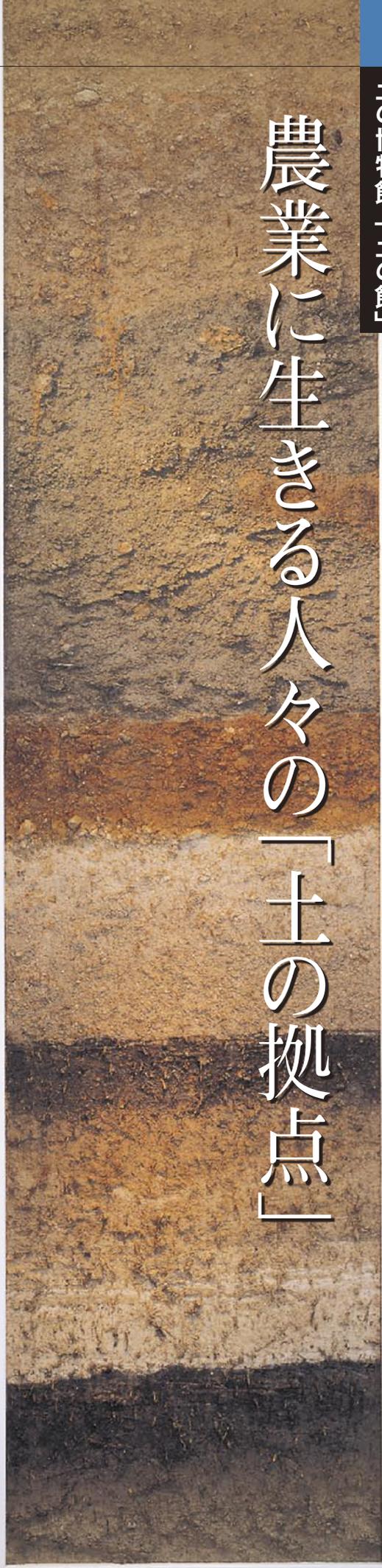
湿原からさらに1.4km、約45分登ったところに展望台があり、湿原を見渡すことができる。

雨竜町には「雨竜沼湿原を愛する会」が組織されていて、同好の士が多い。自主的に会員が湿原を見回ってその保護に努め、ボランティア的にガイドや解説を行っている。会報が発行され、熱心に広報活動を続けている。

美しい自然をそのまま後世に伝えることが、どれだけ難しいことであり、強い意志と多くの方々の理解を得るための膨大な忍耐と努力が必要であることを、彼らは日々の活動を通じて私たちに語りかけ、教えてくれる。

# 農業に生きる人々の「土の拠点」

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11



泥流地帯の土層  
113252 札幌市立土の博物館

上富良野町西2線北25号の丘陵地帯に本社を置

くスガノ農機が、農業博物館「土の館」を開館したの  
たのは1992（平成4）年7月である。以後、施設を増設する  
かたわら、見学研修コースを設けるなど工夫をこらした  
ので、団体客は急激に増え、入館者数は20万人を超えた。

土の館を建設した同社3代目社長の菅野祥孝さんは、

「農業は人間の努力が1割、あとは自然の力です。ときには優しく、ときには厳しい自然と向き合う農業こそ、  
『無尽の工場』であることを忘れてはならないのです」

と語る。

土の博物館は大きく三つにわかれている。このうちの  
一棟が「土の館」で、正面には未開の地の標本が掲げら  
れている。第1展示場には北海道の開拓期に、過酷な条  
件の中で開墾に立ち向かった人々の農機具類と、初代社  
長菅野豊治の農機具への取り組みが刻まれている。

第2展示場は土がメインで、土のでき始めから世界の  
農耕の歴史を探求できるコーナーでは、北海道開拓初  
期に使われた和犁（スキ）や西洋農機具の土を耕す畜  
力プラウなどの世界の古代洋犁類が並んでおり、次の  
コーナーには土と環境に関する

資料が並んでいる。小麦の30年間連作に成功した大規模農  
場から、小さな野菜農家まで、全国50カ所の土壌を採  
取し、展示した土づくりコー  
ナーは国内唯一のものという。

圧巻は第1と第2をつなぐ階段の壁に取り付けられた  
縦4mの巨大な土の標本展示だ。もつとも下層は1万  
年前ごろの沼地に土砂が堆積した層。ほぼ中間あたり  
には1897（明治30）年に三重県から入植開墾した  
ころの土層が見える。その上に位置するのが1926  
（大正15）年に起こった十勝岳噴火による泥流大災  
害2mの痕跡だ。鉍毒を含んだ土は作物どころか草  
も生えず、何とか土



「土の館」



1926年の十勝岳噴火は後に三浦綾子氏が『泥流地帯』として、復興を描いている。

## 十勝岳の噴火と泥流

1926（大正15）年5月24日午後4時17分、大雪山系の十勝岳（標高2077m）が大爆発を起こした。この爆発により中央火口

丘一帯が破壊され、火山灰は空を覆い、溶岩は積雪を溶かして泥流となって、火口から2.8km下の鉱山事務所までわずか1分間というおそるべき速さで下った。

泥流はさらに美瑛川、富良野川にわかれて流れ、家屋、橋、鉄道などを破壊し、25km離れた富良野原野を埋め尽くすのに25分間しかからないという物凄さだった。

この泥流により死者、行方不明者は144人、家畜は64頭が死に、建物全壊、流出372戸、田畑流失740ha、被災者は1500人余り、損害額は256万円という

自然災害ではかつてない未曾有の惨事となった。

この災害と復興をモデルにしたのが三浦綾子の小説『泥流地帯』である。

：地底を削るような激しい音を立て、泥流は滔々と流れている。助けを求めて人が流れる。どこかの家が山際に突き当たって、バリバリと壊れる。馬も幾頭も流れて行く。丸太が流れて行く。：

十勝岳は活火山で、それ以前にも1857（安政4）年と1887（明治20）年に爆発があり、これ以後にも1962（昭和37）年6月29日と30日に2度、爆発が起こり、噴火口付近で硫黄採取中の作業員ら5人が死んでいる。

### Data



#### ●お問い合わせ先

上富良野町教育委員会

Tel. 0167-45-5511

土の博物館「土の館」

Tel. 0167-45-3451

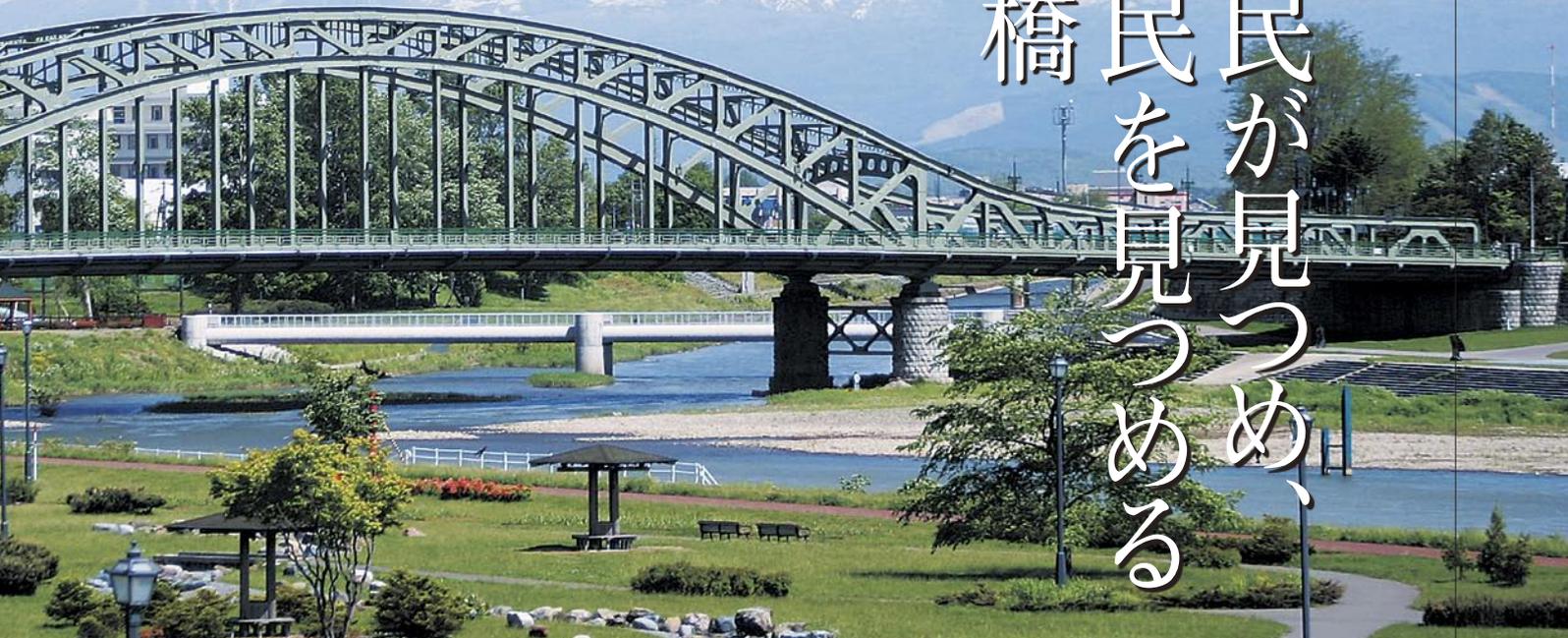
開館日：5月1日～9月30日 無休

10月1日～4月30日 土・日・祝

日、年末年始休館

開館時間：10時～16時

# 市民が見つめ、 市民を見つめる 名橋



「いくつもの時代と思い出を刻みながら、人々の暮らしを見つめてきた橋があります」——これは、『旭橋』という名の豆本（発行・旭橋を語る会／平成14年）の書き出しである。

旭橋に限らず橋は古今東西、出会いや別れや旅立ちの背景として、人間模様を映してきた。橋にはそれぞれ独特の個性があり、物語性があり、その地に育った住民の原風景として記憶されている。それがまたその町の魅力でもあった。

「あった」というには訳がある。橋は川を横断する、いわゆる道路である。よって橋は通行に便利なように改良され（つまり個性は失われ）、橋を渡っていることすら気がつかないことさえあるほどになった。旭橋と並ぶ名橋と言われた、1924（大正13）年竣工の札幌市の豊平橋も、その三連のアーチ橋は、なくなった今でも描くことができるけれども、現在の豊平橋を描くことはもちろん、その形態を思い出すことも困難である。橋はもう、国道何号という道路に、吸収されてしまったのである。

そんな現代において旭橋は、幸運にも生き長らえてきた。いや、単なる幸運ばかりではなく、人々の愛着と保存への熱意、その先進的工学技術によって73歳を迎えたのである。その間には、太平洋戦争時に鉄製の欄干の供出（昭和19年）や、経済性や利便性から、照明灯が全国一律の水銀灯に

なる（昭和41年）など、その原型を保つことが困難な歴史も乗り越えてきたのである（欄干は昭和32年に木製から再び鉄製に戻され、昭和58年には飾り塔やランタン型の照明灯が復元された）。

旭橋の歴史は1892（明治25）年、現在の橋の位置にわずか幅一間（約1.8m）の土橋（表面に土をかけた橋）が架けられたのに始まる。それまでは旭川村から石狩川の対岸、近文原野に行くには、渡し舟しか方法はなかった。その後、木橋の時代を経て、1904（明治37）年にアメリカから輸入された鋼鉄製による初代旭橋が架けられたが、師団方面への路面電車の通行を可能にするためもあり、1932（昭和7）年、橋長225.4m、幅員18.3mの現在の旭橋が竣工する。設計指導をしたのは、当時の北海道大学工学部長・吉町太郎一博士である。ちなみに彼の師は、北海道遺産である小樽の北防波堤を設計した広井勇である。

道北の中心都市旭川市の地図を見ると、大川河口の扇状地の、まったく逆の扇状地となっているのが分かる。本流石狩川、牛朱別川、忠別川、美瑛川が街の西部で合流し、漏斗で集められたように、景勝地神居古潭へと東ねられるのである。このことは、川の街旭川が、橋の街でもあるということだ。その数760橋以上といわれ、明治の名橋心齋橋を始め、俗に八百八橋といわれる水の街



現在の旭橋の渡橋式（昭和7年）。



●問い合わせ先  
 北海道開発局旭川開発建設部  
 地域振興対策官  
 Tel. 0166-32-1111 (内線3455)  
 旭川市企画財政部企画課  
 Tel. 0166-26-1111 (内線2612)

大阪に匹敵する。よって旭川市民にとって橋は身近であり、なくてはならないものである。必然的にその代表格である旭橋に対する市民の思い入れは、他の街とは比べようがないものなのだ。

旭橋の正面に、標語が書かれた半円の額が掲げられている珍しい写真が豆本にある。その額には、扇の要の位置に「誠」とあり、以下「忠節」「礼儀」「武勇」「信義」「質素」と扇状に書かれている。文中の逸話によれば、電車が橋の上を通過するときは、車掌が「気をつけ！」と号令をかけたところ。何とも戦時色の強い話だが、橋が単なる道路の延長ではなく、第七師団の第一鳥居の意味合いもあったと想像されるのだ。

現在の旭橋の風景は穏やかである。夕日を受けたシルエットや、川面の水蒸気で霞む、ライトアップされた旭橋は、ロマンチックな北国の情景である。この穏やかな名橋を、次世代も原風景にとどめ、受け継いでいくことを願うのである。



初代旭橋。昭和7年に深川市の納内橋として再生され、昭和40年まで使用された。（写真は「旭橋60周年記念誌」より）

# 「北海道」命名の地は カヌーの聖地

北見山地の主峰天塩岳（1557.6m）を源とする天塩川は流域面積5590km<sup>2</sup>、全長256

kmの流程をもつ北海道第二の大河である。中流部から下流部にかけては蛇行が多く、それが切り離されて半月湖として残っている所も少なくない。

最上流部の岩尾内ダムや中流に堰堤があることを除けば、本流にはダムはないから、長流の中ではもともと自然河川の趣が残されている一つであろう。もちろん堤防が整備されているところもあるが、山や崖に沿っている箇所も少なくない。宗谷本線の車窓からも、そして平行して走る国道からもさまざまな姿の天塩川の自然が楽しめる。

50年ほど前まで自然状態がよく保たれていたからチョウザメの生息情報があることでも知られていた。今でも約200種類の鳥類が観察され、ウグイ、ハナカジカをはじめとして、上流部にはイワナ、ヤマメ、絶滅危惧種のイトウの生息も確認されている。北海道のもっとも北を流れるため、低標高でも高山性の植物が生育する。

天塩川の上流部は森林に覆われたところが多い。中流部では水田が広がるが、その北限は現在、美深町あたりにある。音威子府から下流は畑作地帯だが、天塩中川付近では北海道大学の天塩ならびに中川地方研究林がある。このあたりになると天塩山地もかなり標高が低くなって、せいぜい数百メートルの低山になる。一方では比較的緩やか

で山頂が平らなところにはしばしば高層湿原が発達する。

名寄市から北東に入ったところにはピヤシリ湿原、松山湿原などがあり、さらに下流の幌延町には中峰の平湿原がある。下流部に近づくると低地にも泥炭地が多くなる。雄信内（おのつぶない）、幌延（ほろのべ）あたりは天塩川の蛇行部分が切り離されてできた半月湖が多いが、その周囲のほとんどはかつて湿原であった。河口は天塩町で、ここで天塩川は北側から長く延びてきている海岸砂丘に遮られ、大きく南に向きを変えて日本海に流れ込む。その北にはサロベツ湿原が広がる。この湿原もかつて天塩川が作り上げたものだ。河口付近でそのサロベツ湿原を流れてきたサロベツ川が合流する。

河口に近い湿地には天塩松の名で呼ばれる湿地生のアカエゾマツ林があり、これは、かつて国外でもグランドピアノの響板、高級なヨットやモーターボートの甲板材として重用された。

天塩川は、中流域の風連町から人工構築物がなく、河口までノンストップで川下りができる。その区間は日本一長い157kmとあって、ロングツーリングを楽しむカヌー愛好者に人気。流域に点在するカヌー工房でマイカヌーを作り、大河に漕ぎ出せば、きらめく大自然を体験できる。流域には、20カ所のボートをはじめ、温泉やキャンプ

## チヨウザメ復活の動きも

天塩の名はアイヌ語の「テッシ・オ・ベツ」から来ており「築・多い・川」を意味する。ここでいう「築」は人が設けた魚獲りのためのものではなくて、あたかも築にみえるような岩があちこちにある、という意味だそう。美深町恩根内にはまさにその岩が並んでいる光景がみられる。

幕末の探検家・松浦武四郎は1857（安政4）年、天塩川流域を旅した記録『天塩日誌』で「船縁にたくさん蝶鮫が三角の頭を出して気味が悪かった」と述べている。その後、急速に消滅したが、近年では1996年、98年などにそれぞれ体長1.6m、2.4mの大物が河口で捕獲された。今、チヨウザメを復活させようとする試みが始まり、美深町では、びふかアイランドでチヨウザメの観察ができる。

また、音威子府には、松浦武四郎が調査の途上で「北海道」の命名を発想した場所を示す木標が建立されている。



場が身近に楽しめる快適なアウトドア環境が整っている。

流域13市町村には、行政やNPO法人、市民グループなどが天塩川をステージにさまざまな活動を展開している。全国規模で開催されているカヌーツーリング大会「ダウン・ザ・テッシ・オー・ベツ」もその一つで、すでに13回大会を数え、多くの天塩川ファンの人気を呼んでいる。

また、157km先の河口まで一気に漕ぎ下る「天塩川100マイルカヌーツーリング大会」も2002（平成14）年に開催された。



流域の工房で生まれたカヌーで川を北上していく。

## Data



- お問い合わせ先
- 北海道開発局旭川建設部 地域振興対策官  
Tel. 0166-32-1111（内線3455）
- NPO法人 天塩川リバーネット21  
Tel. 01654-9-6711
- 北海道カナディアンカヌークラブ  
Tel. 01656-2-1611（事務局:美深町役場内）



天塩川には多くのカヌーイストが集まる。

# 氷河が描き、 山火事が晒した造形美

北海道の屋根大雪山の北、北見山地の北端がゆるやかに宗谷海峡へ落ち込むところ、それが宗谷丘陵だ。一番高いモイマ山でも高さは235m。稚内市、豊富町の東側にある緩やかな起伏の丘陵は、空からは指を揃えたように並んで見える。この規則的な「指の並び」地形が周氷河地形だ。意味としては「氷河の・周囲に形成された・地形」である。ではなぜ、こんな地形ができたのか？

氷河の周囲では土壌の表層の凍結と融解が繰り返されて、表層の土壌が融けると斜面上部の石や砂は下へ転げ落ちる。加えて凹んだ谷の部分は融けた水や雨水が流れて浸食が進行する。この繰り返してなだらかな地形が造られる。その後、氷河は消えて地形だけが残ったのだ。

こうして形成されたなだらかな丘陵は間氷期になると次第に植物に覆われ、ついには森林が発達することになって、かつては立派な森林に覆われていた。

この状態はずっと続いていたと推定されるが、北海道に住む人が徳川時代中期から増加するにつれて森林の伐採が始まった。しかし、明治年間まではそれでもかなりの森林があったと推定される。

この地方の森林は明治後期にかなり伐採され、さらに大正年間に起きた大規模な山火事で失われた。この時の山火事でいまの稚内市の抜海岸か



## 左窓側に座して空から味わう

周氷河地形は約1万年前に終わった最後の氷河期（ウルム氷期）に形成された。典型的なものは宗谷丘陵のほかに十勝地方や根釧原野でも見られるが、宗谷丘陵のものは特に見事である。

飛行機から見ると分かりやすいし、美しい。稚内空港を離陸した数分から十分ほど前後がチャンス。座席は左の窓側にとるといい。

現在、その緩やかな丘陵には国内最大規模を誇る肉牛牧場があり、厳しくも豊かな自然に育まれた健康な宗谷黒牛が約3000頭も放牧されている。その一角に滞在型宿泊体験施設「宗谷岬エコビレッジ」がある。風力と太陽光で電力をまかない、

地場産品を食材として供給し、排泄物は有機堆肥化して還元するなど資源循環の体験ができる。また、宗谷丘陵には2005（平成17）年秋には57基の風力発電用風車が立ち並び予定である。

宗谷丘陵周氷河地形を見るには先に述べたように飛行機からみるのが一番だが、天気次第で必ず見られるとは限らないし、第一、時間が短すぎる。気球でもあれば一番いいかもしれないが、陸路だと稚内市から宗谷岬まで行って、灯台のところから丘陵へ続く道があるから、それを牧場のほうへ辿るといい。

ら火に追われて海に入ったヒグマが利尻島に泳ぎ着いたという記録が残っている。

こうした山火事後、周氷河地形の丘陵は森林という厚い緑のカバーを失って、いま、見られるようなササ原になった。樹木は強い風を受けてなかなか回復できない。いまのところ、谷の中だけにやっと森林ができてきている。けれども周氷河地形は森林というカバーがなくなって、その回復が遅いために、かえってはつきりと見えるようになった。樹木が十分に生育して立派な森林ができていたら、それに隠されて地形は識別できないだろう。

一部は牧草地や放牧地になっているから、そこでは緑のカーペットを敷きつめたように地形がなおさらよくわかる。

## Data



●お問い合わせ先  
 稚内市商工観光課 Tel. 0162-23-6161  
 宗谷岬肉牛牧場 Tel. 0162-76-2428

# 野火が維持した 特異な景観



小清水原生花園は、網走市より東南に約15kmの位置にあり、北はオホーツク海に面し南は濤沸湖に挟まれた、東西に延びる砂丘列の上に発達した延長約8kmに及ぶ海岸草原で、面積は約275ha、幅の広いところで200mほどである。

海浜ではハマヒルガオ、ハマニガナ、ハマニンニク、コウボウムギ、砂丘ではハマナス、エゾスカシユリ、エゾキスゲ、クロユリ、ヒメイズイ、エゾカワラマツバ、ハマフウロなど多くの種類が春から秋にかけて、代わる代わる咲き続けている。

網走・釧路間を結ぶ釧網本線が草原の中を国道と併行して走り、背後に濤沸湖、東側には斜里岳をはじめとする知床連山がみられるなど、優れた背景をもつ。

また、濤沸湖畔は、湖とともに広々とした馬の放牧がみられ、湿性の草原にはヒオウギアヤメ、センダイハギなどの群落もある。

1951（昭和26）年に北海道名勝に、また1958（昭和33）年には国定公園に指定された。「原生花園」という呼び名はきわめて優れたキャッチコピーだが、植物学的なものではない。本来は「海岸草原」が正しい。旅行雑誌『旅』の名編集長と言われた戸塚文子さんが最初に命名したものとされている。

「原生花園」は放牧が行われたり、海岸林が伐採などで樹林が失われて草原が発達したものが多

い。小清水原生花園も放牧の影響を強く受けていたほか、蒸気機関車の時代、春先に煙突から飛んだ火の粉で野火を繰り返し、海岸草原の維持に役立ったらしい。放牧に伴って持ち込まれた牧草の枯れ草が焼き払われ、多くの自然の草の発達が促されたのである。その後、ディーゼル機関車に変わったため野火がなくなり、牧草が繁茂し、相対的に自然の花が減ることとなった。現在、計画的な野焼きや帰化植物の除去が毎年行われ、この特異な景観の維持に努めている。

原生花園のほぼ中央には、インフォメーションセンターHanaがある。隣には釧網本線原生花園駅があり、駅から天覧ヶ丘、遊歩道と続いている。原生花園の花が見頃を迎える6月下旬から7月下旬まで、地元観光ボランティアガイド協議会が天覧ヶ丘付近に常駐し、園地内の花や周囲の様子を無料で案内している。



●お問い合わせ先  
 小清水町産業課商工観光係  
 Tel. 0152-62-2311  
 小清水原生花園  
 インフォメーションセンターHana  
 Tel. 0152-63-4188

# 江差追分 全国大会

ここに響く生命の唄。



## 唄い継がれた 「かもめの 鳴く音」

江差には、江差に生まれた文化を大切にし、先人の開拓の苦勞やニシン漁の繁栄の歴史をいつまでも伝えたいという、多くの人々の思いがあふれている。北海道遺産第1回選定の「姥神大神宮渡御祭」と並び、「江差追分」にもその熱い思いが込められている。

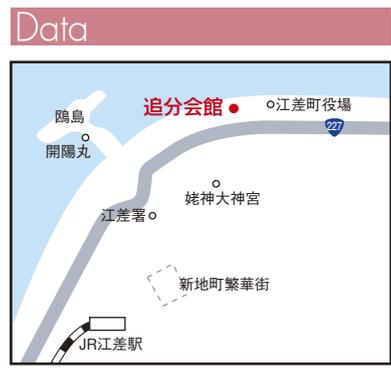
江差追分のルーツには諸説があり、研究者は多いものの未だ決定的な定説はない。一説には、250年ほど前に信州中山道にあった馬子唄が越後に伝わり、越後追分となり、やがてニシン漁で

賑わった江差の港に北前船などにより運ばれたと言われている。その追分節が、江差にもともとあった江差謙良節などといまわって、長い間、北国の厳しい風土にもまれながら多くの先人たちに唄い継がれ変遷し、独特の哀調を帯びたものとして、現在の「江差追分」となった。

江差追分には、前唄、本唄、後唄がある。前唄も後唄も、本唄の情緒をより高めるためにあり、比較的自由に唄われるが、本唄には基本譜がある。江差追分節がいくつかの流派で唄われていた1909（明治42）年、正調節を作ろうと各派が合意し音符の作成が手がけられたもので、現在の基本譜は1969（昭和44）年にまとめられた。

本唄はたった七節でできているが、そこには先人たちの悲喜こもごもの思いがこめられている。もっともよく親しまれている本唄「かもめの鳴く音に ふと目を さまし あれが 蝦夷地の山かいな」は、蝦夷地での大成を

夢見て北前船に乗り込んだ北陸地方の武士や農家の人たちが、かもめの声に目を覚まして蝦夷の山々を目にした時の期待と不安に満ちた心情を唄ったものであり、別の本唄「忍路（オシヨロ） 高島 およびも ないが せめて 歌棄（ウタスツ） 磯谷まで」は、北上



●お問い合わせ先  
江差町追分課（江差追分会館内）  
Tel. 01395-2-5555

するニシンを追って漁に出る男たちを女人禁制の積丹半島の手前にある歌棄、磯谷まで見送りたいという切ない思いを唄ったものとして有名だ。江差追分を守り、全国、海外に広がっているのは1935（昭和10）年に発足した「江差追分会」。2004（平成16）年4月現在で、158支部（うち海外5支部）が組織され、会員数も4000人を超える。

1963（昭和38）年に始まった江差追分全国大会は、平成16年で第42回大会を迎えた。全国各地から集まった約400名が、大会の3日間に「かもめ」の本唄を次々と唄い、その年の優勝者が決定する。少年、熟年、一般の部に分かれており、その層の厚さにも驚く。

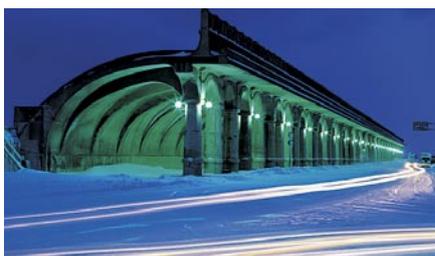
江差追分会館では観光客にも江差追分にふれてもらおうと、100畳のホールでの実演や江差追分を学べる道場も開設している。

# 第1回選定25件の横顔



平成13年10月22日、第1回選定の北海道遺産25件が生まれました。

「稚内港北防波堤ドーム」(稚内市)



稚内-樺太大泊間の旧稚泊航路整備の一環として、冬季の北西越波防止のために建設された半アーチ式ドーム。海上からの高さ14m、柱間6mの円柱72本を並べた長さ427mの世界でも類を見ない独特の景観と構造を持ち、港湾土木史に残る傑作であるとともに、旧樺太航路時代の記憶を残す歴史遺産。設計者は、当時26歳の土木技師・土谷実。



ニシン漁は、松前藩の時代から北上するニシンを追い、千石場所を変えながら、地域にさまざまな物語を残した。豊漁、薄漁、凶漁と気まぐれに押し寄せるニシンに翻弄され、いったん群来を見ると番屋では数の子や身欠きニシン作りにあけくれたが、ある年、ニシンは忽然と姿を消した。そんなニシン漁の賑わいを今に伝えるのがニシン街道の番屋である。

「留萌のニシン街道 (佐賀番屋、旧花田家番屋、岡田家と生活文化)」  
(留萌地域)

「増毛の歴史的建物群 (駅前の歴史的建物群と増毛小学校)」  
(増毛町)



留萌線の終着駅、増毛。駅の周りには明治初期から営業を続けてきた旧商家丸一本間をはじめ、日本海の風雪に耐えた石造りや木造の建物が並ぶ。高台にある増毛小学校は1936年に建築された戦前期都市型木造校舎としては道内唯一の現役校舎。今も子どもたちが元気に学び、体育館ではコンサートも開かれるなど、多くの人に親しまれている。



アメリカ人宣教師G.P. ピアソン夫妻の私邸として1914(大正3)年に建てられた。夫妻は道内各地を伝道し、その終着に選んだ地がアイヌ語で「地の果て」を意味する野付牛(現在の北見)。娯楽運動や慈善活動など、夫妻の志は今も北見の精神文化のよりどころとして多くの市民に親しまれている。設計者は近江兄弟社創設者としても知られているW.M. ヴォーリス。

「ピアソン記念館」(北見市)

「ワッカ／小清水原生花園」  
(常呂町、小清水町)



ワッカ原生花園は「龍宮街道」と呼ばれる日本最大の海岸草原。オホーツク海とサロマ湖に面し、春から秋には300種以上の草花が咲き誇る。車の乗り入れ規制や地元漁協による植林など先駆的な試みを展開する。小清水原生花園は一時期、花が衰退したが、1993（平成5）年より野焼きや球根の植栽、帰化植物の除去を行い、花のあふれる公園によみがえった。濤沸湖沿いのヒオウギアヤメ群落とそこに放牧される馬の群れは特有の景観。



阿寒国立公園の原始の自然に囲まれた「神秘の湖」は世界有数の透明度と美しい乳白色の霧の風景で知られる。摩周湖には流入河川も排水河川もないが水位は一定している。その景観は、北海道の湖沼と山岳の複合景観としてもっとも代表的なもの。摩周湖および周辺環境の保全に向けた「摩周湖宣言」に集約される地域住民の取り組みは高く評価されている。

「摩周湖」(弟子屈町)

「根釧台地の格子状防風林」  
(中標津町など)



中標津町、別海町、標津町、標茶町にまたがる格子状防風林は、スペースシャトルからも撮影されたように、そのスケールにおいても地球規模的な、北海道ならではの雄大なもの。幅180m、総延長643kmの林帯は、防風効果だけではなく野生生物のすみかや移動の通路としての機能も果たしている。開拓時代の殖民地区画を示す歴史的意義も持つ。



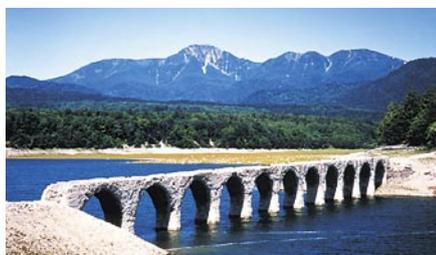
湿原景観を構成するすべての要素が一望できる学術的にも貴重な湿原。一部は「霧多布湿原泥炭地形成植物群落」として1922（大正11）年に天然記念物に指定され、数百種の高山植物が自生している。春から秋にかけて咲く花々の美しさを楽しみ、タンチョウや白鳥など百種の野鳥も観察できる。地域では湿原保全のトラスト活動が積極的に展開されている。

「霧多布湿原」(浜中町)

「螺湾（らわん）ブキ」(足寄町)



足寄町の螺湾川に沿って自生する螺湾ブキは高さ2～3mに達する巨大なブキ。かつては高さ4mに及び、その下を馬に乗って通ることができたというが、なぜ大きくなるのかは謎が多い。その味は繊細で、ミネラルが豊富で繊維質にも富む。地元では産学官が一体となった商品開発も進めており、足寄町オリジナルのブランドとして知名度を高めている。



昭和初期に十勝内陸の産業開発を目指して建設された第一級の鉄道遺産。市民と産学官が一体となった運動の結果、34橋梁が保存された。中でもタウシュベツのアーチ橋は、糠平湖の水位によりその姿を変える「幻の橋」として近年人気が高まっている。地元の担い手たちの積極的な活動は産業遺産の保全・活用モデルとして全国的に知られている。

「旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群」(上士幌町)

「石狩川」(流域48市町村)



大雪山系を源とし、上川、空知、石狩の大平野を形成して日本海に注ぐ大河川。北海道開拓の歴史の中で、度重なる洪水と闘いながらも、交通・物資輸送の道として大きな役割を担い、またサケ漁など北海道の歴史と文化が刻み込まれている母なる川。河口の石狩市では2002（平成14）年から、鮭地引網漁の技術と文化を次の世代に伝承する事業を実施している。

「空知の炭鉱関連施設と生活文化」  
(空知地域)



空知は国内最大の産炭地として最盛期に100炭鉱、83万人の人口を擁し、日本の近代化を支えたが、エネルギー政策の転換による合理化、閉山が相次ぎ、空知の炭鉱は姿を消した。地域に残る炭鉱関連施設は生産から生活まで多岐にわたり、まさに屋根のない博物館。また、三笠市を発祥とする北海道踊りなど、ヤマは今に続く多くの生活文化を残している。



第2農場に残る模範家畜房および穀物庫は1877（明治10）年に建設された北海道大学でも最古の施設群で、1戸の酪農家をイメージした日本農業近代化のモデルとしてクラーク博士により構想された。内部に展示されている農業機械群は、明治初期の農場開設時の輸入機械をはじめ、近代農業史を語る貴重な資料である。春から秋には一般公開も実施されている。

「北海道大学 札幌農学校第2農場」  
(札幌市)

「小樽みなとと防波堤」(小樽市)



「港湾工学の父」広井勇により建設された北防波堤は、セイロン（現スリランカ）のコロンボ港防波堤を参考にし、独特の傾斜ブロック工法を採用した日本初の長大堤防。ケーソン法を取り入れた南防波堤とともに、今も現役で機能する。防波堤に守られた小樽みなとは北海道移住の玄関口となり、また物流拠点、貿易港として、商都・小樽の繁栄を支えた。



蝦夷富士「羊蹄山」に降った雨や雪解け水が濾過され、地中のミネラルを加えながら50～70年という長い時間を経て流れ出る恵みの湧水。「京極のふきだし湧水」は国内最大級のもので、1日の湧水量は8万トン、30万人の生活水に匹敵する。1985年、環境庁の「名水百選」にも選ばれ、この自然が与えてくれた、おいしい水を求めて訪れる人が絶えない。

「京極のふきだし湧水」(京極町)

「昭和新山国際雪合戦大会」  
(壮瞥町)



子どもの遊びを、大人が真剣に競う冬のスポーツとして確立したことは、雪国・北海道にふさわしい新しい文化といえる。ルール・用具の開発から、資金集め、企画運営まで地域住民が主体となって進められている。1989（平成元）年に始まった大会の歴史の中で、まれの若者たちの情熱とアイデアは海を渡り、今では北欧など海外でも「YUKIGASSEN」が開かれている。



内浦湾沿岸は北海道と本州を結ぶ縄文文化の交易路で、函館市（旧南茅部町）には集落規模としては国内最大級の大船遺跡など89か所の遺跡、精巧な漆塗り製品など400万点を超える出土品がある。伊達市の北黄金貝塚は、縄文早期（7000年前）～中期（6000～4000年前）の遺跡で、住居や全国的にほとんど例のない「水場の祭祀場」が発見されている。

「内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群」  
(函館市、伊達市など)

「姥神大神宮渡御祭と江差追分」  
(江差町)



姥神大神宮渡御祭の起源は300年前にさかのぼる。その年のニシンの豊漁に感謝を込めて行われたお祭りで、現在も毎年8月9日～11日にまちは祭り一色となる。13台の山車（やま）が祇園囃子の調べによって町内を練り歩きさまは圧巻。江差追分は中山道の馬子唄をルーツに、北国の厳しい風土にもまれながら多くの先達に唄い継がれてきた。日本国内だけでなく、海外にも多くの愛好者を持つ。はるか遠い江差のニシン景気を現代に伝える。

## 「上ノ国の中世の館（たて）」 （上ノ国町）



上ノ国町の夷王山中腹に広がる山城「勝山館」跡。松前藩の祖とされる武田信広が15世紀に築城し、200戸以上の和人とアイヌ民族が一緒に暮らしていた。北海道の中世史には謎の部分も多いが、勝山館・夷王山墳墓群の調査により、歴史のミッシングリンクを埋める多くの資料が発掘された。日本海を一望する館跡からは中世のロマンが感じられる。



江戸時代の日本で最後に築城された城郭で、箱館戦争では旧幕府軍と官軍の戦場となった。城の北側には道内唯一の近世的な寺町があり、龍雲院、法源寺、松前家の菩提寺・墓所など五つの寺が現存している。また、城と寺町の一帯は北海道でもっとも早く見ごろとなる桜の名所でもある。松前町の歴史を知ることは開拓以前の北海道の歴史を理解する上で重要。

## 「福山（松前）城と寺町」（松前町）

## 「函館山と砲台跡」（函館市）



華やかな夜景で有名な函館山にはもう一つの顔がある。津軽海峡を望む函館山は明治中期に要塞化が進められ、多数のレンガ壁・コンクリート洞窟掩蔽壕・砲台座が残る。大規模の旧状を残す軍事土木遺産は全国的にも例が少ない。終戦まで立入制限されたため、今も貴重な動植物の宝庫となっており、自然に触れる散策コースとして市民に親しまれている。



函館市電は明治期に馬鉄で出発し、1913（大正2）年に電車化、今も市民の足として定着している。路面電車が醸し出す風情を含めて観光都市・函館で果たしている役割は大きい。1917（大正7）年に始まった札幌市電は、路線の拡大や車両の改良を加え都市交通の中心だったが、地下鉄の開業などによって現在は1路線のみが運行。市民の愛着は強い。

## 「路面電車」（函館市、札幌市）

## 「アイヌ語地名」（北海道各地）



北海道の地名の約8割はアイヌ語に由来するとされている。アイヌ語の地名は、知らない場所でも、その名から地形や位置づけなどが分かるものとなっており、現在は片仮名や漢字で表記され原音と異なる場合もあるが、本来はアイヌ民族の自然と調和した伝統的生活の中から歴史的に形成された。アイヌ文化の意義を理解する重要な手がかりとなっている。



世界の各民族には、それぞれ独特の精神的意味合いを含めた「文様」がある。アイヌ文様の基本は「渦巻き（モレウ）」「とげのある形（アイウシ）」「うろこ（ラムラムノカ）」の三つ。これらを組み合わせ、連続した線でむすんでいく。その形状、図案や色彩は、印象深い美的価値を含んでおり、文化的にも秀逸なものとして近年、注目が高まっている。

## 「アイヌ文様」（北海道各地）

## 「北海道のラーメン」（北海道各地）



ラーメンの起源は諸説あるが、戦後急速に北海道民の食生活の中に定着し、寒冷な気候から、コクがあり濃い味のラーメンが、北海道の代表的な食文化として発展した。ラーメンは、北海道の観光資源としても欠かせない存在であり、札幌・函館・旭川・釧路など、地域ごとに特色を持ったラーメンが脚光を浴び、ご当地ラーメンブームの火付け役となった。

絵手紙  
の部

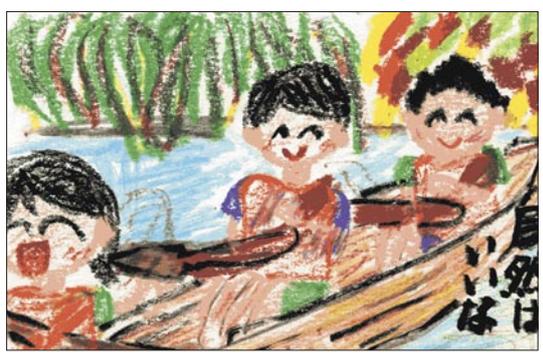
(敬称略)



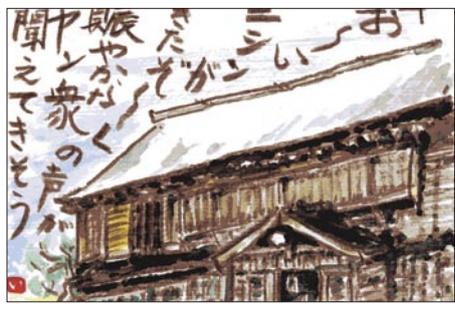
**グランプリ**  
沖津 大樹 (7歳)  
札幌市  
「北大第二農場」  
北海道大学 札幌農学校第2農場



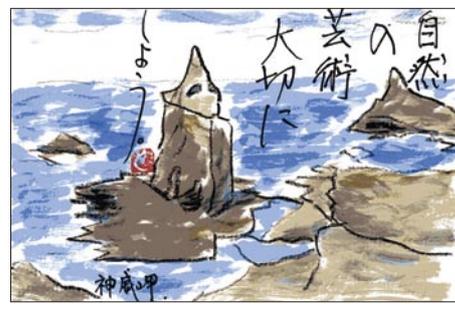
**金賞**  
成田 美津江  
紋別市  
「流水砕水船ガリンコ号」  
流水とガリンコ号



**金賞**  
戸田 菜月 (11歳)  
札幌市  
「自然はいいな」  
天塩川



**銀賞**  
菅原 勇  
虻田町  
「ニシンがきたぞー」  
留萌のニシン街道



**銀賞**  
山本 敏子  
札幌市  
「すごーい」  
積丹半島と神威岬

入選作品



**上坂 麗 (7歳)**  
伊達市  
「ナイフ」  
内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群



**白石 袈裟夫**  
東京都  
「小樽港と防波堤」  
小樽みなとと防波堤



**標津町賞**  
石井 裕子  
札幌市  
「鮭の飯寿司」  
サケの文化



**静内町賞**  
大澤 和子  
東京都  
「静内二十間道路の桜並木」  
静内二十間道路の桜並木



**堀 弘喜**  
小樽市  
「活気あふれる港 小樽」  
小樽みなとと防波堤



**山崎 裕子**  
埼玉県東松山市  
『ジングスカン』  
ジングスカン



**福岡 修**  
東京都  
『こころ踊る昭和雪山合戦大会』  
昭和雪山国際雪合戦大会



**村木 通輝**  
東京都  
『旧国鉄土幌線コンクリートアーチ橋梁群』  
旧国鉄土幌線コンクリートアーチ橋梁群



**佐藤 真理子**  
札幌市  
『札幌時計台』  
開拓使時代の洋風建築

「絵手紙の部」入選作品



**佃 七映 (11歳)**  
札幌市  
『北海道の馬文化』  
北海道の馬文化(ばん馬、日高のサラブレッドなど)



**中村 杏利 (7歳)**  
札幌市  
『クラーク先生と』  
北海道大学 札幌農学校第2農場



**大澤 友加 (12歳)**  
東京都  
『福山城(松前城と寺町)』  
福山(松前)城と寺町



**竹内 妙子**  
札幌市  
『石炭の歴史村』  
空知の炭鉱関連施設と生活文化



**山本 静枝**  
音更町  
『摩周湖』  
摩周湖



**瀬尾 千富**  
広島県福山市  
『北海道のラーメン』  
北海道のラーメン



**高澤 昌良 (小2)**  
札幌市  
『北海道のラーメンはおいしいよ』  
北海道のラーメン



**白幡 都**  
千葉県八千代市  
『北。ふる里の味は金メダルよと孫達にじまん。』  
北海道のラーメン



**戸田 壮俊 (7歳)**  
札幌市  
『電車大好き』  
路面電車



**澤田 雄輝 (12歳)**  
札幌市  
『祝日の電車』  
路面電車



**福井 敦子**  
留萌市  
『群来まつ番屋』  
留萌のニシン街道



**山本 玲子**  
札幌市  
『螺湾ブリ』  
螺湾ブリ



**五十川 沙紀**  
岩見沢市  
『京極のふきだし湧水』  
京極のふきだし湧水



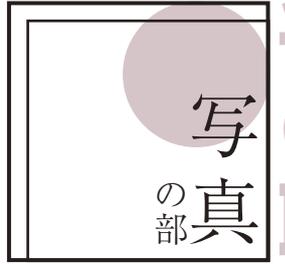
**小野 一郎**  
兵庫県赤穂市  
『稚内港北防波堤ドーム』  
稚内港北防波堤ドーム



**中村 政信**  
東京都  
『ワッカ原生花園』  
ワッカ/小清水原生花園



**水戸 教子**  
函館市  
『函館市電』  
路面電車



**グランプリ**  
**中山 茂**  
 札幌市  
 『夕暮れの牧場(マキバ)』  
 北海道の馬文化  
 (ばん馬、日高のサラブレッドなど)

(敬称略)



**金賞**  
**小林 詳司**  
 東京都  
 『世界に1つだけの競馬』  
 北海道の馬文化  
 (ばん馬、日高のサラブレッドなど)



**金賞**  
**伊原 薫**  
 美幌町  
 『妖光月夜』  
 摩周湖



**銀賞**  
**太田 裕実**  
 北広島市  
 『イチャルバ(先祖供養)』  
 アイヌ文様

入選作品



**出嶋 重六**  
 室蘭市  
 『旭橋夏景』  
 旭橋



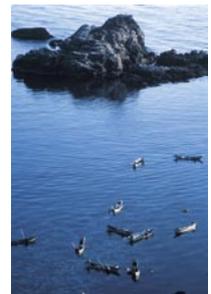
**銀賞**  
**平賀 重喜**  
 札幌市  
 『豊平館のライトアップ』  
 開拓使時代の洋風建築



**玉手 恒弘**  
 岩見沢市  
 『冬の河口』  
 石狩川



**稚内市賞**  
**町田 敦**  
 埼玉県狭山市  
 『碧に染まるドーム』  
 稚内港北防波堤ドーム



**積丹町賞**  
**三浦 純**  
 石狩市  
 『初夏の島武意』  
 積丹半島と神威岬



**出嶋 淳子**  
 室蘭市  
 『古代舞踊』  
 内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群



**高田 悦也**  
帯広市  
『タウシュベツ橋梁』  
旧国鉄土幌線コンクリートアーチ橋梁群



**瀨瀬 政由**  
上士幌町  
『風雪に耐えて』  
旧国鉄土幌線コンクリートアーチ橋梁群



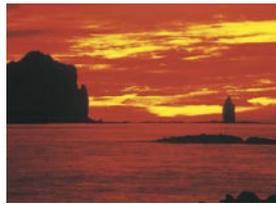
**井筒 里志**  
江別市  
『火薬庫』  
江別のれんが



**粒見 澄男**  
帯広市  
『サケに感謝する(アイヌのマレック魚)』  
サケの文化



**鈴木 英樹**  
稚内市  
『氷河期の遺産』  
宗谷丘陵の周氷河地形



**紅露 雅之**  
小樽市  
『カムイ岬暮色』  
積丹半島と神威岬



**根廻 文子**  
札幌市  
『京極のふきだし湧水』  
京極のふきだし湧水



**田中 ツヤ子**  
音更町  
『大雪の山と共に』  
旧国鉄土幌線コンクリートアーチ橋梁群



**大熊 彰**  
帯広市  
『春爛漫の松前城』  
福山(松前)城と寺町



**桜枝 広美**  
網走市  
『緑の館』  
ピアソン記念館



**田中 憲弘**  
苫小牧市  
『地獄谷展望台』  
登別温泉地獄谷



**塩谷 進**  
札幌市  
『時をこえて』  
ニッカウキスキー余市蒸溜所



**吉田 昌子**  
池田町  
『8月の静かな裏摩周湖』  
摩周湖



**丹羽 明仁**  
愛知県小牧市  
『摩周湖の朝』  
摩周湖



**須原 重明**  
札幌市  
『ほのぼのの湿原』  
北海道の馬文化(ばん馬、日高のサラブレッドなど)



**酒井 善章**  
札幌市  
『初雪の農場』  
北海道大学 札幌農学校第2農場



**高松 祐子**  
大阪府堺市  
『二人の影 —北防波堤ドーム』  
稚内港北防波堤ドーム



**片山 隆**  
音更町  
『稚内港北防波堤ドーム』  
稚内港北防波堤ドーム



**矢野倉 隆**  
茨城県水戸市  
『函館の路面電車』  
路面電車



**阿部 義博**  
函館市  
『がんばれ函館ササラ電車』  
路面電車

携帯写真  
の部

(敬称略)



グランプリ

中野 陽子

札幌市

『やさしい瞳、あったかい瞳。』  
北海道の馬文化  
(ばん馬、日高のサラブレッドなど)



金賞  
手塚 真弓

札幌市

『おばあちゃんと市電と』

路面電車



銀賞

竹中 美穂

別海町

『野付湾内の太陽』  
野付半島と打瀬舟



銀賞

山本 文

札幌市

『老若男女、楽しくジンギスカン!』  
ジンギスカン



金賞

永田 英美

稚内市

『稚内港北防波堤ドーム』  
稚内港北防波堤ドーム



渡邊 貴文

宮城県仙台市

『江差の祭り(姥神大神宮渡御祭)』  
姥神大神宮渡御祭と江差追分



岩田 浩二

札幌市

『地下食堂ラーメン』  
北海道のラーメン



前田 佳津子

兵庫県西宮市

『クリスマススイブの時計台』  
開拓使時代の洋風建築



森末 純

札幌市

『初めて市電に乗ります』  
路面電車



亀田 康子

大阪府豊中市

『馬車で楽しむワッカ原生花園』  
ワッカ/小清水原生花園

入選作品

「携写部の写真選入作品」



**芹田 理恵子**  
札幌市  
「ニセコでスキー！」  
スキーとニセコ連峰



**新田 順子**  
札幌市  
「琥珀色の世界」  
ニッカウヰスキー余市蒸溜所



**福田 洋子**  
札幌市  
「鮭ゲット」  
サケの文化



**阿部 信行**  
美瑛町  
「サーモン大好き次男坊」  
サケの文化



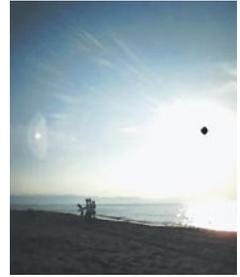
**上戸 智仁**  
丸瀬布町  
「森林鉄道雨宮21号」  
森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」



**吉野 祐司**  
浦河町  
「牧歌」  
北海道の馬文化(ばん馬、日高のサラブレッドなど)



**田尻 千恵子**  
札幌市  
「雪原の川辺」  
石狩川



**甲谷 典子**  
札幌市  
「夏の思い出(石狩川)」  
石狩川



**佐藤 秀行**  
留萌市  
「極寒の佐賀番屋にたたくマイカー」  
留萌のニシン街道



**入江 貴之**  
丸瀬布町  
「我家のベランダ遺産」  
森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」



**森 良枝**  
札幌市  
「冬の路面電車」  
路面電車



**川口 真**  
標津町  
「山漬け鮭とトバ」  
サケの文化



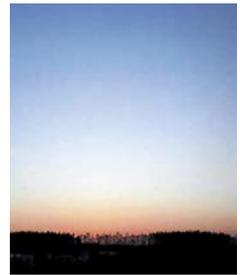
**菅原 由加里**  
留萌市  
「雪舞う花田家番屋」  
留萌のニシン街道



**関上 恵子**  
小樽市  
「ラーメン、いただきます！」  
北海道のラーメン



**大山 晃代**  
紋別市  
「ガリガリガリンコ号」  
流水とガリンコ号



**高橋 正彦**  
標津町  
「格子状防風林(標津)」  
根釧台地の格子状防風林



**黒澤 恵人**  
神奈川県横浜市  
「稚内港北防波堤ドーム」  
稚内港北防波堤ドーム



**守山 英男**  
札幌市  
「ワカサギ釣ってもジンギスカン」  
ジンギスカン



**甲谷 祐美子**  
札幌市  
「函館の夜景」  
函館山と砲台跡



**金井 友子**  
石狩市  
「魔の大雪3日間 in ニセコ」  
スキーとニセコ連峰

## 北海道遺産応援団



北海道経済連合会／(社)北海道商工会議所連合会／北海道経営者協会／北海道商工会連合会／北海道中小企業団体中央会／(社)北海道観光連盟／(社)北海道建設業協会／北海道商店街振興組合連合会／札幌商工会議所／北海道農業協同組合中央会／北海道信用農業協同組合連合会／ホクレン農業協同組合連合会／北海道厚生農業協同組合連合会／全国共済農業協同組合連合会北海道本部／(株)NTTドコモ北海道／北海道旅客鉄道(株)／北海道中央バス(株)／宝酒造(株)／ジェイ・アール北海道バス(株)／(有)神内ファーム21／(株)竹中工務店北海道支店／中道リース(株)／野口観光(株)／プロミス(株)／北海道ガス(株)／(株)北海道銀行／北海道電力(株)／(株)北酒連／雪印乳業(株)／アークスグループ(株)ラルズ／(株)ロイズコンフェクト／ロッテスノー(株)／(株)ノーザンクロス

### 【協 力】

(財)太陽北海道地域づくり財団／(財)北海道地域総合振興機構／(社)北海道バス協会／(財)北海道市町村振興協会／北海道市長会／北海道町村会／北海道

お問い合わせ先

## 北海道遺産構想推進協議会

〒060-0004 札幌市中央区北4条西6丁目 毎日札幌会館3階  
TEL 011-218-2858 FAX 011-232-4918

(メールアドレス) [heritage@northerncross.co.jp](mailto:heritage@northerncross.co.jp)  
(ホームページ) <http://www.hokkaidoisan.org>





稚内港北防波堤ドーム／昭和新山国際雪合戦大会／空知の炭鉱関連施設と生活文化／  
 跡／京極のふきだし湧水／内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群（函館市、伊達市など）／路面  
 （佐賀番屋、旧花田家番屋、岡田家と生活文化）／根釧台地の格子状防風林（中標津町）  
 ス語地名／旧国鉄土幌線コンクリートアーチ橋梁群／摩周湖／北海道のラーメン／

霧多布湿原／増毛の歴史的建物群（駅前の歴史的建物群と増毛小学校）／函館山と砲台  
 電車／福山城（松前城）と寺町／螺湾（らわん）フキ／ヒヤソン記念館／留萌のニシン街道  
 など／石狩川／上ノ国の中世の館（たて）／アイヌ文様／ワッカ・小清水原生花園／アイ  
 小樽みなどと防波堤／北海道大学 札幌農学校第2農場／姫神大神宮渡御祭と江差追分



北海道遺産  
 Hokkaido Heritage